

# 祝福された美

## バハオラ

### The Blessed Beauty

Mahnaz Afshin 著

バハイ出版局

#### 1. 新しい日の幕開け

「おお、待ちこがれた人々よ。恐れるなかれ。彼はやってこられた。彼の幕屋とそこにある彼の栄光に目を向けよ。それは、新しく顕現された『日の老いたる御方』なのである」(バハオラ)

それはテヘランの栄光に満ちた秋の日のことであった。木々の葉は黄金色に変わり、太陽は暖かい光線を放ち、雪でおおわれたダマヴァンドの山々の荘厳な美を引き立てていたそのような日、世界は歴史の中で、最も偉大かつ神聖なる出来事を迎えるのであった――それは、ペルシャで尊敬されたある高官の家族に、まことに大切な「子」が生まれるという出来事であった。その「子」の名前はフセイン・アリといったが、後にバハオラ(「神の栄光」という意)として知られるようになる。彼は新しい精神的な「教育者」であり、過去のあらゆる神の使者たちが約束してきた「人物」なのであった。彼の聖なる誕生日は1817年の11月12日であった。

バハオラの幼年時代はとても幸せで、安楽な日々であった。彼の父親ミルザ・ブズルグは大臣で、カージャール朝の国王の宮廷に仕えていた。幼い時から、バハオラは他の子供らとは非常に異なっておられた。彼の母親は、バハオラは決して泣いたり、騒ぎ立てたりしないとよく言われた。バハオラは教師を持っておられるわけでも、



バハオラの父親、ミルザ・ブズルグ

学校へ行かれたこともなかったが、並外れた知識を持っておられ、彼を知っていたあらゆる人々は驚嘆させられたのであった。鋭い黒い目と黒い眉、整った鼻と引き締まった口に、人格の力強さと強い意思の力が映し出されていた。

## 2. 夢の実現

「神(へ)の精神的な愛は、人を清く神聖になす。」

バハオラが5才の頃、彼の父親はある夢を見た。その夢の中で、バハオラは広い海の中を泳いでおられ、彼のからだは海全体をおおうほどに輝いていた。突然、何匹もの魚が四方八方から現れ、それぞれバハオラの髪の毛をつかんだ。しかし、その膨大な数にもかかわらず、魚は彼に危害を加えることはできず、彼が泳ぐ後についていくだけだった。

大臣はこの夢に強い印象を受け、それはただ夢ではなく何か特別な意味があるのだと思った。当時、「占い師」と呼ばれる能力の優れた人々がおり、彼らは夢について解釈することができた。大臣

はそのうち最も有名な者を一人呼び出した。その夢について聞かされると、占い師はこう解釈した。広い海とは、生存の世界を意味し、バハオラはただ一人誰の援助もなしにそれを支配するであろう。彼は望み通りのことをなし、誰も彼の進む道を妨げることはできないであろう。その魚は、困惑した人々のことで、彼らはバハオラを取り囲み、彼にすがりつこうとするが、彼の聖なる髪の毛一本でさえも傷つけることはできないであろう。彼は神によって守られているからである。

その占い師が「祝福された美」<sup>1</sup>の所へ連れていかれると、彼はバハオラを大変ほめたたえた。それで、バハオラの父親はますますバハオラをいとおしく思い、愛情に満ちた保護の手で彼を守るのであった。

## 3. あやつり人形劇

「この世は劇にすぎず、むなしく空虚で皆無なものである。…この世に愛着を持つなかれ」

バハオラは幼い頃から、並外れた知性と理解力を持っておられた。彼は多くのことに気がつかれ、年上の者らが思いもつかなかったよ

---

<sup>1</sup> バハオラのこと

うなことを理解しておられた。例えば。まだ幼い頃、彼が兄の結婚式に出席した時の出来事である。当時の慣習に従い、結婚の祝いは七日間続いた。最後の夜、あやつり人形劇があり、多くの重要な客がそれを見るためにやって来た。バハオラもまた、そこにおられた。幕が開くと人形がいくつか現れてサムリ王がまもなくやってくる



ことを告げた。何人かが床を掃除し、他の者は道に水をまき、ある者は、きれいなじゅうたんを 広げていた。人々はみな興奮し、全てを整頓するために忙しく動き回っていた。そうして布告人がもう一度現れて、国王を迎える準備をするように言った。宮廷にいたあらゆる者が立ち上がった。ついに威厳と光輝を示して、サムリ王が

現れた。

国王は壮麗な衣を身につけ、美しい王冠をかぶり、首のまわりや指に多くの飾りをつけ、手には宝石をちりばめた王笏を持っていた。彼が宮廷に現れると、礼砲とラッパの音が鳴った。国王はゆっくり、また堂々と王座の方へ進み、腰かけた。宮廷にいた全ての者は畏敬と敬意のためにおじぎをし、頭を下げていた。護衛が何人か入って来て、盗人を一人連れて来て、国王の命令を待っていた。国王

はその盗人の首を切るよう命じた。執行人がただちに前へ出て、国王の命令に従った。赤い液体を使った血が、その人形の首からどつと流れ出た。

それから、国王の王国内のある領土の市民がその主に対して反乱を起こしたという知らせが入った。この気に入らぬ知らせを聞くやいなや、国王はすぐに兵士を送り、この反乱を始末するように命令した。兵士らが出て行き、幕の後ろから銃の音がして、王の命令が遂行されたことを示した。

バハオラはこの劇をとっても興味深く見ておられた。劇が終わると、どうやって人形が出たり入ったりして劇がなされるのかと不思議に思われた。20分ぐらいすると、バハオラはわきの下に箱をかかえた男を目にされたので、彼の所へ行って箱の中には何が入っているのかお尋ねになった。それは、宮廷やあやつり人形の国王、大臣や護衛たち、延臣やその他劇に出てきた全ての者を収めているのだ、と男は答えた。

これを聞いたバハオラは、幼いながらも、我々の世界に関するいくつかの大切な真理について悟られた。この世の美しいものも全て、実はあやつり人形の劇のようなものだ。彼は次のように言われた——「この世の富や物質は全て永遠に続くものでないことを人々は知っているのに、それでもなお、それらのものに固執するとは、なんと不思議なことか」。

これは、「祝福された美」がいかに深遠で重要なことを常に考えて

おられたかを示している。今もなお、教養がありながらも、この真理に気づかず、物質的な富の追及に人生を費やす人々がいる。彼らは、それが人生の目的だと思っているのである。そして時折、自らの高い地位と名声のために、激しく争い、お互いに殺し合いさえする。もし、立ち止まって黙想するなら、彼らは、人生の終りには棺おけという箱の中に入れられてしまうことがわかるであろう。彼らの名声や富は何の役にも立たなくなるのである。

#### 4. 知識の海

「全ての学識の源は、神を知ることである」

バハオラは子供の頃から、非常に親切で寛大であられた。彼は野外での生活を好まれ、ほとんどの時間を庭園や野原で過ごされた。そして彼には人を引きつける、並外れた力が備わっており、全ての人がそれを感じていた。あらゆる階層の人々が彼に会うことを求めた。宮廷の大臣たちでさえも彼のまわりに集まり、子供らもまた、彼を愛していた。バハオラがまだ13歳か14歳の頃にその優れた学識で有名になられた。彼はどんな主題についても話すことができ、いかなる問題を提示されても答えを出すことができられた。大きな

集まりでは、彼はウラマー<sup>2</sup>と話をされ、難解な宗教的課題についても説明なさるのであった。彼らはみな、深い関心を示して彼の言葉に耳を傾けたのであった。

バハオラが22歳の時、父親が亡くなり、政府はイランの慣習通りに、父親の大臣の職を継ぐことをバハオラに求めた。しかし、バハオラはその申し出を断られた。当時の総理大臣はこのことを知って次のように言った――「彼を独りにしておくがよい。そのような地位は彼にはふさわしくない。彼には何かより高遠な目標があるようだが、私には彼の考えていることはわからない。しかし、彼が何か深遠な使命に運命づけられていることを私は確信している。彼の考えは我々の考えとは違うのである。独りにしておくがよい。」

バハオラはまだ若かった頃、ヌールへ旅をされた。それはマジンダランの一地域であり、彼の親類が住んでいた。ヌールにはタクーラという村があり、バハオラの父親はそこに広大な土地を持っていた。そして、バハオラの家族はほとんど毎年のように夏をそこで過ごした。

その頃、ムハンマド・タキという名の宗教の教師がいた。彼は宗教に関する博識で知られており、彼の生徒らは、彼を師とすることを誇りとしていた。

ある日、約200人ほどの生徒がいるクラスの中で、ムハンマド・タキはイスラムの伝承を一つ読み上げ、それについて解釈するよう生

---

<sup>2</sup> イスラムの学者、宗教指導者

徒らに言った。しかし誰も、正しい解釈ができなかった。その時、そこに居合わせたバハオラは説明する許しを得ると、まことに簡潔かつ美しい言葉で説明されたのであった。あらゆる者が驚き、ムハンマド・タキは自分の生徒の劣っていることに腹を立てた。バハオラが教室から出て行かれた後、ムハンマド・タキは生徒らを叱りつけた――これまで何年も勉強してきたにもかかわらず、誰一人として正しい答えを出せないとは恥ずべきことである。それに対して、学校へ行ったこともないこの「若者」(バハオラ)はあれほど簡潔にみごとに説明して答えを出したのではないかと。

もちろん、ムハンマド・タキは、バハオラが並の人物ではなく、彼の知識と理解力も並大抵でないことに気づいてはいなかった。バハオラには、生まれつきの聖なる知識が備わっていたのである。ある日、ムハンマド・タキは二つの奇妙な夢について生徒らに話した。それはバハオラに関する夢だった。彼はこう話した――

「ある時、私は何人かと一緒に立っていた。すると突然、みな、ある家の方を指さして、『約束された人物』があそこにいるという」。

「そこですぐにその家へ行ってみたが護衛は入ることを許さず、『約束された人物』はある人と話をされているということであった。護衛たちの話から『約束された人物』が話し

かけておられるのはミルザ・フセイン・アリ(バハオラ)であることを私は知った」。

そうして彼は続けて、もう一つの夢について語った。

「いくつかの箱があり、人々は、それらはバハオラのものであると言った。その一つを開けてみると、本がいっぱい詰まっていた。私はその一つを開いてみたが、驚いたことに、あらゆる言葉が宝石でできているのだった。それらの言葉はあまりにも輝かしいものだったので、私は目を覚ました」。

## 5. バハオラの結婚

「神が賛美され…神の王国について宣言される家は全て、神の園であり、神の幸福の楽園であることを知れ」

時はすばやく過ぎ去り、バハオラが結婚する時が来た。彼の妻にふさわしい幸運な女性とは一体誰なのだろう。

神はその人物をすでに選んでおられた。それは、神の侍女の中で最も優しく、最も愛情に満ちた女性であった。この聖なる女性は

アシイ・カヌームであった。彼女の父親もまた国王の宮廷で重要な地位を占めていた。

バハオラとアシイ・カヌームの結婚はなんと輝かしく、栄光あるものだったろう。当時の慣習に従い、宝石商人らが彼女の家に来て、美しい飾り物を準備した。彼女の結婚持参品をバハオラの家へ運ぶのに40頭のラクダを要した。彼女のドレスのボタンでさえも、金でできているほどだった。しかし、最も重要なことは次のことであった。つまり、これほど豪華で安楽な生活を送っていたにもかかわらず、バハオラが突然、なんの妥当な理由もなく投獄され、家から財産が略奪された時に、妻のアシイ・カヌームは一度も不平を言わず、辛抱したことである。その時、彼らは一晩にして全てを失い、次の日の食糧もないほどであった。

アシイ・カヌームは背が高く、優美で、濃い青色の眼をしていた。彼女は、当時の女性らの間で栄光ある女王のように輝いていた。あらゆる人は彼女の英知と知性を賛美した。彼女はとても優しく愛情に満ちており、あらゆる人は彼女の優れた人格と冷静で落ち着いた物腰に心を動かされた。バハオラとアシイ・カヌームはめったに、市内のエリートたちをもてなすことに参加されなかった。きらびやかな服も着ず、ポケットは空で、家は小さいが心は神に近い貧しい人々、そんな人々に会うことに、バハオラとアシイ・カヌームはより喜びを見いだしたのであった。

バハオラの家では毎朝毎夕、神の言葉が唱えられ、新しい精神

が授けられ、彼の家は全ての人に開放されていた。食事用の部屋は常に貧しい者や困った者を受け入れる準備ができていた。心の清い人々はいかにこの家を愛したことであろう。大きな海のように落ち着き、底深い眼をし、愛と優しさに満ちた心を持ったこの家の婦人を彼らはどんなに尊敬したことであろう。

アシイ・カヌームは、困った女性らの母親のようであった。バハオラは「貧しい者らの父親」と呼ばれていた。それは、美しい日々であった。悲しいことや困ったことがあっても、バハオラの家に入ると、皆それを忘れるのだった。ここに、無力な者らの避難所と純潔な者らの家があったのである。

バハオラとアシイ・カヌームには三人の子供がいた。長男は名をアッバースといい、後に自らの望みにより「アブドル・バハ」として知られるようになる。「アブドル・バハとは「バハのしもべ」という意味である。二番目の子供は、バヒヤ・カヌームという名の、かわいらしく優しい女の子であった。彼女は後に、バハオラから「最大の聖なる葉」という称号をもらった。一番下の子供はマフディという名の男の子で、「最も清き枝」として知られている。

## 6. バブからバハオラへのメッセージ

「現在の秩序はまもなく巻き上げられ、その代わりに新し

い秩序が繰り広げられるであろう」

バブはバハオラの先駆者であり、1844年にシラーズで使命を宣言され、バハオラの到来のために人々を準備させられた。ある日バブは、最初の使徒であるムラ・フサインを呼んでこう言われた――「あなたにしてほしい、とても重要な使命がある。そのためにあなたはテヘランに行かねばならないが、そこで貧しい人や無力な人々に対して親切で有名な人物を捜しなさい。その人物を見つけ出したら、私の代わりにこの書簡を渡しなさい」。

ムラ・フサインはこの重要な使命を遂行するものとして選ばれたことを大変喜び、ただちにテヘランへ向かって出発した。

シラーズからテヘランまでの道のりは遠く、旅は困難なものであった。ムラ・フサインは長い道のりを歩いて、または馬に乗って行かねばならなかった。このようなことにもかかわらず、彼はとても幸せで「最愛なる御方」を喜ばせることならどんな犠牲も耐えられないことはないと思った。彼は熱情と喜びと共に旅を続けていた。彼はバブが語ったこの偉大なる「人物」を見つけ出すという大切な任務を果たせるよう日夜、神の援助を求めて祈った。

テヘラン中から、そのような「人物」を見つけ出し、バブの神聖なるメッセージをその人物に渡すことをムラ・フサインはどうして成し遂げることができるであろうか。しかし、彼にとって、偉大なる人物を捜しに出かけることは、これが最初のことではなかった。彼は「約束さ

れた人物」を求めてカーピラからイランへ向かって出発した時、どのように感じていたか、よく覚えていた。その時、彼はどの町へ行ったらよいか、また「約束された人物」はどの家族に属しているのか、またその人物をどうやって見つけることができるのかさえもわからなかった。彼が知っていたのは、神のみが自分をお導きになるということであった。祈り深い心で彼は神に援助を請い、そうしてついに「約束された人物」バブを見つけ出すことができたのである。

そして今度も神が自分を見捨て賜わず、バブの神聖なるメッセージを渡すことができることを彼は確信していた。そしてついにムラ・フサインはテヘランに到着した。当時はホテルや旅館といったものはなく、旅人は公共のたいしやど隊商宿か、または寺院の周りに建てられている、「ホジレ」と呼ばれる小さな部屋に泊まった。ムラ・フサインはこのホジレに泊まり偉大なる「人物」を見つけ出すことに日々を捧げた。夜は神の導きを求めて祈りと瞑想をした。必ずや全能者は彼の祈りを聞き、助けもなしに放っておかれることはないであろう。

ある晩、ムラ・フサインは寺院のムッラー<sup>3</sup>と「約束された人物」の到来について長いこと話をした。そのムッラーの目と心は偏見によって覆われており、ムラ・フサインの言うことを聞きたがらず、議論を始めた。隣のホジレにはムラ・ムアリムという人が滞在しており、彼は公正で広い心を持っていた。彼はこの会話を偶然に聞き、このムッ

---

<sup>3</sup> イスラムの諸学に通じた人物に対する尊称。寺子屋で読み書きやコーランを教える人にも用いる。

ラーがムラ・フサインに対していかに不公平であり、かつ、話の主題がとても重要であることに気づき、後でムラ・フサインが一人になった時に会おうと決めた。その夜、彼はムラ・フサインの部屋を訪れた。

ムラ・フサインはその時、まだ起きていて、その他誰も来る予定はなかったので、その訪問者を迎え入れた。ムラ・フサインは非常に慈愛を示したので、ムアリムは彼に対して真の愛を感じ、涙が出てきたのであった。この人物の精神的な感受性を見てムラ・フサインはなぜ、自分がここに泊まるように導かれたかを悟った。「あなたの名前と出身地を教えてください」と彼は尋ねた。ムアリムは答えた――「私の名はムラ・ムハマンドで、称号はムアリム。出身地はヌールです。」そしてムラ・フサインはこう尋ねた――「大臣の家族で大臣と同じように善良で人気のある人物を知っていますか」。ムアリムはこう答えた――「はい、大臣のご子息の一人は非常に優れており、大臣と同じような性格です。彼は貧しい者や無力な者の避難所となり、彼の家は常にあらゆる人のために開放されています。彼は一度も学校へ行ったことがありませんが、その博識なことはあらゆる人を驚かせ、ペルシャ語の書道はまことにみごとなものです。また、彼は自然を愛する人です。彼の名はフサイン・アリといい、歳は28です」。

ムラ・フサインの清く誠実な心は自分が捜し求めていた「人物」を見つけたことを感じ取った。それはまるで自分が求めていた「人物」

がここにいることを神が確信させて下さったかのようであった。ムアリムがバハオラの家をよく訪れることを知ると、ムラ・フサインは布に包んであったバブからの貴重な手紙を彼に手渡した。そして翌朝、バハオラの所へ持っていくよう頼んだ。ムアリムは、自分がそれほど大切な物をあずかり、神がそれほど素晴らしい祝福を授けて下さったことを知り得たであろうか。翌朝早くムアリムはバハオラの家に向けて出発した。そこへ着くと、彼は聖なる手紙をバハオラに渡した。

バハオラは巻物を広げ、ちょっと見るといくつかの節を美しい声で唱え、そこにいた兄弟の方を向いてこう言った――「ムサよ、どう思うか」。

バハオラが言われたのはそれだけであった。それからバハオラはムラ・フサインに渡すよう、砂糖ひと固まりとお茶をムアリムに渡された。これは当時、最も崇高な贈物と考えられていた。

ムラ・フサインのもとへ戻ると、ムアリムは自分が見た全てのことを話した。ムラ・フサインは物も言えぬほど喜びに満たされていた。彼はまことにうやうやしくその贈物を受け取り、それに接吻した。そしてムアリムを抱きしめ、彼の目に接吻してこう言った――「わが親愛なる友よ、あなたが私の心を喜びで満たしてくれたように、神があなたの心を喜びで満たして下さいますように」。ムアリムはムラ・フサインの喜びように驚き、なぜこの贈物や訪問がそれほどの喜びの原因になったのか不思議に思った。彼が戸惑ったのも当然のことである。というのも、彼はまだバブとバハオラが誰であるかを知らず、自分の



なしたことの重要性についても知らなかったのである。バブからバハオラへのメッセージはこのようにして、バブの使命の宣言から3か月後、テヘランでムラ・フサインを通して伝えられたのである。

## 7. 輝きに満ちたヌール

「廉直性と離脱性は個人的な布教の天にある二つの最も大きな光のようなものである」

待ちこがれた誠実な人々にバブがその使命を宣言した後、バハオラはこの新しい信教の主な支持者、そして布教者の一人とされた。バハオラはマジンダランのヌールに行かれたが、多くの重要な人物が彼を求めて来た。あらゆる高官たちは、バハオラが父親の政治や政府に関する事柄について話すのを期待していた。しかし、それに反してバハオラは、バブの新しい宗教とメッセージについて語られた。もし役人らがこの新しい大業の教えを受け入れたら、国が真の進歩を遂げるであろうことをバハオラは高官たちにお話しなされた。

バハオラの並外れた知識と、精神的な事柄に対する関心に人々はとても驚いた。バハオラと会い、話をする機会を持った人々の多くは、この新しい大業の信奉者、そして布教者となった。

バハオラに反対して異議を唱えた者の一人は、彼の叔父ミルザ・アズィーズであったが、誰もあまり彼に注意を払うことはなかった。取るに足りない小さな雲がどうして輝かしい「星」を覆ってしまうことができよう。この大業に対してしつこく反対していたミルザ・アズィーズは新しく選ばれたヌールの宗教指導者ムラ・ムハンマドに会い、こう話した―「おおムッラーよ。預言者らの代理人よ！我々の宗教がいかに危険にさらされているかご覧なさい。一人の若者がヌールへやって来て、人々を新しい宗教へと招いている。そしてヌールの多くの住民が彼に従っている。彼がどうやって人々に影響を及ぼしているのかはわからない。彼は魔術を行っているか、または水薬をお茶の中に入れてそれを飲む者をだましているかに違いない」。

ミルザ・アズィーズとムラ・ムハンマドの生徒らは、ムッラーがバハオラと会うように主張したが、ムッラーは拒否した。というのは、彼は自分の教師であるムラ・タキがバハオラと話をした時、そこに居合わせており、バハオラの優れた知識に圧倒されたからである。

## 8. 心の変化

「おお心霊の子よ！総てのもののうち、わが目に最愛なるものは正義である」(「隠されたる言葉」、アラビア編、2番)

しかし、ムラ・ムハマンドは生徒らがあまりにせがむので、ついに生徒の中で最も博識な者のうち二人を遣<sup>つか</sup>わして、バハオラに合わせることにした。ムラ・アッバースとアブル・カシムの二人が選ばれたが、彼らはヌールで以前、宗教指導をしていた者の息子であった。ムラ・ムハマンドは彼らがバハオラに会い、真実を見つけ出すように指図した。彼らが決断することはなんでも受け入れると彼は言った。

彼がバハオラの家に着いた時、バハオラは少数の人と一緒におられ、コーランのいくつかの節についてその意味を説明しておられた。彼らもまた座り、耳を傾けていたが、バハオラという言葉の雄弁さにとても畏敬の念を感じた。そして彼らはその言葉がバハオラの心から来るものであると感じ、彼らの心にも影響を及ぼしたのであった。しばらくするとムラ・アッバースは震え始め、扉の方へ行った。彼はアブル・カシムを呼んでこう言った――「私は尋ねようと思っていた質問を全て忘れてしまいそうだ。私はこの栄光に満ちた『人物』のもとを離れはしない。あなたはムラ・ムハマンドの所へ戻って、何が起きたかを告げなさい!」。するとアブル・カシムはこう答えた――「私も同様である。私はもう、ムラ・ムハマンドとはなんの関係もなく、バハオラに奉仕することに全人生を捧げたいと思う」。この話はその地域全体に広まり、バハオラを見、その言葉を聞くために来る訪問者の数が増したのである。

多くの人々がバブを信じ、堅固な信者になった。マジンダラン、そ

の中でも特にヌールの町は多くの人がバブを信じるようになった最初の土地であった。この布教の旅の後、バハオラはテヘランへ戻られた。

## 9. バダシトでの偉大なる出来事

『最初』の地位において最大の贈物であり、最高の祝福であるのは『英知』である。それは『生存』を保護し、支え、助ける」

イラン北部の初夏は一年のうちで最も威厳あり、美しい時である。道端には花や青々とした牧草地が広がり、驚くほど美しくなる。実のなったトウモロコシの穂や、神からの贈物である太陽の光に包まれた色鮮やかな葉をつけた木々は、親愛なる客たちを待っていたのである。

やがて、バハオラとゴッドスとタヘレが信者らと共にバダシトにやって来た。信教の歴史の中で最も重要な出来事の一つがそこで起こるべく運命づけられていたのである。

バハオラは三つの庭園を借りておられた。一つはタヘレとその同伴者に、一つはゴッドスと信者らに、そしてもう一つは彼自身のためにあてられていた。

バダシトで信者らが集まった理由の一つは、バビ啓示の独立性<sup>4</sup>—についてははっきりと宣告する事であった。というのは、バブの信奉者らはなお、バビ教がイスラム教の継続に過ぎないと思っており、この新しい信教が、天なる書と新しい法律をもたらした独立的宗教であるとは思っていなかったからである。バダシトで、ある奇妙な変わった出来事が起きた時、この事柄はそこにいた全ての者に明らかになったのである。

その出来事とは、次の通りである。ある日、バハオラはちょっと病気にかかり床についていた。ゴッドスがバハオラを訪れ右側に座った。残りの信者らもやって来て、部屋の中に座った。この時、信者の一人が入って来てゴッドスに向かいこう言った—「タヘレが会いたいと言っているので、彼女の庭園に行ってください」。ゴッドスはそれを拒否した。しばらくしてまた信奉者が入ってきて言った—「タヘレはあなたに会わねばならないけれども、もしあなたが会いに行かないなら、彼女自身、あなたに会いに来なければならない」。ゴッドスがそれを拒否しようとした所へタヘレが入って来た。しかし、彼女の精神的で美しい顔からはベールが外されており、それは、信者らを非常に驚かせ、ショックを与えたのである。

---

<sup>4</sup> つまり、バビ教がイスラム教から派生したものではなく、新しい時代のための独自の教えと法律を有した新しい宗教であること。ただし、この「独立宗教」の意味は、バハイ教・バハイ教で説いている「累進的啓示」(神の宗教は人類の発達段階に応じて累進的に啓示されること)の原理と矛盾しているのではない。



信者らがいかに戸惑い、恐れのかは、我々には想像できないことである。それはあまりにも深刻な出来事で、彼らはどうしていいかわからなかった。彼らは純潔と貞節の象徴であるタヘレが、男性の集まりにベールをしないまま現れようなど夢にも思わなかったのである。端的に言って、これは大変な騒ぎを引き起こした。ある者らは怒りに満たされ、ある者らは恐れた。信者の一人アブドル・カリキ・イスファハニは、あまりのショックのため短剣を抜いて自らの喉を切り、叫び、わめきながらタヘレから逃げて行った。ある者らは信教を捨て去り、その集会から去って行った。他の者は彼女の前にただ立っただけで物も言えず、どうしていいかわからないのであった<sup>5</sup>。

タヘレは自分が正しい歩みを取ったことを確信し、優美にまた自信ありげに前へ進み、集まった信者らの真ん中まで進み出た。そうして大きくはっきりとした声でこう宣言した—「私はガエム<sup>6</sup>が発する

---

<sup>5</sup> 当時のイスラム社会では、女性は素肌を男性の前で見せてはならないので、ベールをかぶることは義務づけられていた。タヘレは、男女の平等という新しい時代の幕開けの印として、この行動を取ったのである。

<sup>6</sup> イスラムの約束された人物のこと。「ガエム」とは、(ムハムマドの家族から)「立ち上がる者」という意味で、12番目のイマーム、ミフデイとも呼ばれる人物で、や

『言葉』であり、それは地上の長や身分の高い者らを逃げ出させるような『言葉』なのである。」そして続けてこう言った――「この日は世界中の人々が喜ぶ祝宴の日であり、過去の束縛が粉々に打ち破られる日である。この偉大なる業績に参加した者らは、立ち上がってお互いを抱きしめようではないか」。

さて、タヘレがベールをつけないでいるのを見るのがバブの信者らにとってどうしてそれほどショックなのか、我々には奇妙に思えるかもしれない。今日、我々の周りにはベールをしている女性など見かけないのだから。しかし以前は、イスラム教の女性は自由が制限されており、ベールをかぶらずに家の外へ出ることはできなかったのである。実際もし見知らぬ男が女性の顔を見たなら、それは罪と見なされていたのだ。女性はベールの他に、顔を覆う布もつけていなければならなかった。時には女性の声が見知らぬ男に聞かれることも許されなかった。

そのような状態であったゆえに、タヘレがベールをせずに現れた時、信者らが恐れ驚いたのも無理はなかったのである。これは信者にとって大きな試練であった。

---

がて時が熟すると、世界に正義をもたらすための現れるとされていた。「12番目のイマーム」は「隠されたイマーム」とも言われるが、これはムハマドの没後、後継者としてイマームが役を司っていたが、12番目のイマームは姿を突如消した。彼は「バブ」(門)と呼ばれる人物たち(複数)を通して信奉者たちと連絡を保っていたとされる。この隠れたイマームも、最後の「バブ」もその後、後継者を指名しなかった。それで、やがて「隠されたイマーム」が再び現れて、世に正義をもたらすという信仰が現れたのである。

バハオラと他の信者らは、全員で81名であり、22日間、バダシトに滞在した。

このようにして、あの美しい平野にあるバダシトで、その偉大なる最初の集会が開かれ、また、バビ啓示の独立性が初めて宣言されたのである。後日、タヘレは殉死し、女性の解放運動のための最初の殉死者となったのである。

## 10. 試練と困難の始まり

「おお世界の人々よ！ 神の宗教は愛と調和をもたらすためのものである。敵意感や不和のもとになすなかれ」

バハオラの結婚生活は初め、幸せなものであった。アシイ・カヌームはそのように素晴らしい「夫」と健康で美しい子供たちを持ってとても幸せであった。8歳になるアブドル・バハと6歳のバヒア・カヌームは両親の愛で輝く家庭に住んでいたのである。彼らは涼しく、美しいタクール村で夏を過ごし、子供たちはとても幸福な時を送った。

タクールには山脈があり、その山々の頂は青い空に触れるようにそびえ、神に秘密をささやいているかのようであった。反対側には川が流れており、タクール全域に良い香りを漂わす花で満たされて

いた。バハオラの家族はなんと快適で素晴らしい所に住んでいたことであろう。しかしある日突然、悲しい出来事が起こり、彼らの平穏な生活を一転させてしまった。アシイ・カヌームと子供たちがテヘランにいる時、召使が家の中へ飛び込んできてこう言った——「ご主人様が逮捕されました。ご主人様は靴も履いておられず、連れて行かれました。足からは血が流れ、帽子はかぶらず、服は引き裂かれ、首の周りには鎖がかけられていました」。この恐ろしい知らせはアシイ・カヌームに強いショックを与え、彼女の顔は蒼くなった。子供たちもおびえ、震え、泣き始めてしまった。親戚や友人たちは、この知らせを聞くと、自らの命を守るために逃げ出し、アシイ・カヌームを一人にしてしまった。彼女を見捨てなかったのは黒人の召使であるイスファンディアと黒人の侍女だけであった。

やがて人々は家の中に押し入り、全てを略奪してしまった。美しいじゅうたんやベルベットのクッション、飾り物全てとその他、手をつけることのできるあらゆる物を彼らは横奪した。ようやく寝る時間になると、何も身につけて持っていくものがなくなったほどであった。

ある時、アブドル・バハはその頃のことについて語っておられた——「私たちは一晩にして全てを奪われ、翌朝は何も食べる物もないほどであった。私はお腹がすいていたが、パンさえもなかった。私の母は小麦粉を少し私の手のひらに分けてくれた。このようなことにもかかわらず、私たちは幸せであった」。

バハオラの忠実なる兄弟ミルザ・ムサは、アシイ・カヌームの家族

が家から出て、彼が借りた二つの部屋に移るのに手を貸した。また彼は、バハオラとアシイ・カヌームの結婚の印として飾り物をいくつか取っておくことができた。

バハオラが逮捕されたのは、半分気の狂った二人のバビ教徒が犯した過ちのためであった。その二人は、最愛なる御方バブが殉死したのはシャー<sup>7</sup>の責任に他ならないと信じて、自制心を失い、あだを打とうとしたのである。

ある朝、シャーが宮殿の構内から出て来た時、そのバビ教徒の一人が発砲した。大臣や多くの身分の高い者らが駆けつけた。その若いバビ教徒が使った武器からすると、健全な判断を持った者なら、そのような愚かな行為をし得ないことが明らかであった。

情け容赦なく、憎悪に満たされて、バビ教徒らの信用を落とす機会を待っていた多くの人々や大臣らは、ついに目標を達したのである。その二人のバビ教徒らは恐ろしい拷問を受け、他のバビ教徒らも恐ろしい困難に直面せねばならなくなった。

当時、シャーに雇われていたオーストリアの役人は、自分が目撃した残酷な行為に恐れをなし、仕事をやめることを申し出た。オーストリアの友人にあてた手紙の中で、彼はこう語っている。

「我が友人よ、この不幸な人々の所へ私と一緒に来るがよい。彼らは目をもぎ取られ、切り取られた自らの耳を食べ

---

<sup>7</sup> ナーセロッドイーン・シャー(当時のペルシャ王)

るように強いられる。あるいは執行人の手によって残酷にもその歯は抜き取られ、頭は金槌でたたきつぶされる。不幸な被害者らの胸には穴があけられ、その中にろうそくの芯が入れられ、火がともされ、その火によって市場が明るく照らされている。彼らは、バビ教徒らの足の裏の皮をむき、その傷ついた足を沸き立った油の中に入れ、馬の蹄のように足に金具をつけ、その者を走らせる。それだけではない。彼らは、しまいには半分死にかけた身体の手と足を取り、頭を下にして木に吊り下げ、銃を向けて発砲するのである。私は約150発もの弾丸で何人かの身体が引き裂かれるのを見た。オーストリアの人々は、私が今記した事が事実かどうかと疑い、誇張しているのではと思うかも知れない。私は神が、この日に私を生かしておられなければ良かったのにとさえ思うくらいである」。

次に述べることによって、「バビ共同体の真の『導き』』として知られていたバハオラの真の運命について描写することができよう。敵は、バハオラをこの犯罪の張本人として非難し、彼を逮捕することにした。しかし実際は、バハオラはシャーの命を奪おうとしたその行為には何の関係もなかったのである。

それ以来、「祝福されたる美」の命は危険にさらされ、あらゆる人が彼に注意を向けていた。総理大臣でさえ、バハオラの命が危な

いことを知り、興奮がおさまるまでどこか近くに身を隠すように言ったが、バハオラはこの提案にも耳を傾けなかった。有罪な者こそが恐れるのであり、無罪な者は恐れることはない！

翌朝、バハオラは馬に乗り、勇気と自信を持ってテヘランの北部（ニヤヴァラン）にある国王の野営地へと向かわれた。その途中、バハオラは、ロシア大使の秘書である義理の兄弟を訪れられた。ニヤヴァランの近くでバハオラを見かけた政府の役人らは、すぐにナーセロッディーン・シャーとその同伴者らに告げたが、彼らはとても驚き、そのような重罪の咎<sup>とが</sup>を受けている者が隠れもせず、勇敢にも家から出て来るとはどういうことか、と不思議に思った。

バハオラは、テヘランからニヤヴァランへ行く途中、兵士らによって逮捕された。彼は裸足で帽子もかぶらず、あの暑く燃えるような夏の日、シア・チャルの土牢の方へと連れて行かれた。彼らはどうしてバハオラにそのような仕打ちをしたのだろうか。実は彼ら自身もその理由を知らなかったのである。その無知な人々はほとんど自分の行いの理由について考えもしなかった。土牢に近づいて来ると、怒りに満ちた老婆が突然現れ、バハオラに対して続けざまに悪態をつき、彼の聖なる御顔に石を投げつけようとした。しかし兵士らがやってきてそれを妨げた。その老女はののしり、こう懇願した――「どうか、どうか、石を投げさせて下さいな。そうして、この年老いた者<sup>8</sup>に報いを受けさせて下さい」。

---

<sup>8</sup> 自分(老婆)のこと

これを聞いたバハオラは、彼女に石を投げさせ、報いを受けさせるよう、兵士らに言われた。

人々は精神的な目と耳とを失ってしまった。人々はバハオラの清く、罪のない顔を真っ向から見ていたにもかかわらず、この事柄について調べることもなければ、立ち止まって彼が有罪かどうかについて考えようとしなかった。ムッラーたちは、バハオラが神の宗教と彼らの国の敵であると人々に言った。そして人々はこの言葉を盲目的に受け入れ、「祝福された美」に対して、あらゆる残酷な仕打ちをしてしまったのである。

## 11. テヘランの土牢

「おお神よ！あなたの道において私に降りかかった困難は、私の喜びを増しました」

バハオラとその40人の信奉者らが投獄された土牢は、かつて公衆浴場の貯水場であった。後にそれは牢獄として使われるようになったが、それは地下にあり、その天井はとても低かった。そこには窓もなく、空気や光が入り込む隙間もないほどだった。

そこは陰鬱で、不潔な場所であった。バハオラの首には、国中で最も恐れられていた鎖いんちがかけられていた。それは「カラ・グハル」と

呼ばれ、50キロ以上の重さで、バハオラは背を伸ばすことができず、常に体を曲げていなければならなかった。彼は4か月間、その鎖の重みに耐えられたが、そのために生じた傷跡は死ぬまで首に残っていた。

三日三晩、誰もバハオラにパンや水をさえ持ってこなかった。役人の一人が心配し、ひそかに、お茶をコップ一杯持ってこようかとバハオラに話した。しかしバハオラはこれを受け入れなかった。そしてようやくアシイ・カヌームとミルザ・ムサが家から食べ物を持ってきたのだが、バハオラはそれも食べようとはされなかった。他の友人や囚人らが空腹であるというのにどうして自分だけが食べることができよう。

信者らは二列に並び、お互いに向き合っていた。バハオラはいくつかの節句を教えて唱えるように言い、彼らはそれを毎晩、大声で唱えたのであった。その土牢はナーセロッディーン・シャーの宮殿のそばにあり、ある時、彼はバビ教徒らが節句を唱えているのを聞き、それがどこから来ているのかと尋ねた。彼はバビ教徒らが土牢の中で祈りをしているのだと知らされた。翌日、ナーセロッディーン・シャーは焼き肉をいくらか囚人らの所へ持っていくように命じた。みな、バハオラが食べてもよいと言うのを待っていたが、彼はその肉には手をつけないほうがよいと言われたので、彼らはそれに従った。

毎日、執行人らが牢獄へやってきては、その日処刑される者ら

の名前を呼び出した。彼らは、鎖が首からはずされると、バハオラの所へ喜んで行き、バハオラは神の恵みと慈悲があると彼らを安心させられた。そうして、彼らは他の信者らに別れを告げ、殉死の場へと進んで行った。そして処刑が終わると、執行人らはバハオラや他の者らに彼らがいかに勇敢に死に立ち向かったかを語るのであった。大切なことは、このような苦しみや、悪臭と陰鬱な場所、重い鎖、そして粗末な食べ物でさえも、信者らを「信仰」から引き離すことができなかつたということである。

## 12. すばらしい夢

「神の愛の炎を、汝らの輝かしい心の中で明るく燃え立たせよ。そしてそれに聖なる導きの油を注ぎ、汝らの堅忍不拔によってその炎を保護せよ」

アブドル・ヴァハーブは、その土牢に入れられていた信者の一人であったが、バハオラと共に鎖につながれていた。ある晩、彼は奇妙な夢を見た。その夢に興奮した彼は、夜明けに目を覚ますとその事について話した。彼はその夢の中で、とても明るい所におり、あらゆる方向に飛ぶことができ、とても幸せで心地よく感じていたというのである。バハオラは、この夢の意味とは、アブドル・ヴァハー

ブがその日殉死するということであり、したがって辛抱し感謝すべきであると言われた。アブドル・ヴァハーブはこの言葉を聞くとともに喜び、そして土牢にいた友人らみなに別れを告げた。そうして彼はバハオラを心から抱きしめ、さよならを言った。

このようにして毎日、信者のうち一人か二人が殉死の場へと呼び出された。アブドル・ヴァハーブや他の信者らの愛と信念は非常に強く、死刑執行を任務とする執行人らでさえ、彼らの不屈の精神と勇気に驚嘆したのであった。彼らは風にそよぐ葉のように震え、おののく他の囚人らとは違っていた。彼らは清い心で、神の大業を認めていた。彼らはその血によって、神の大業の若木<sup>わかぎ</sup>に水をまくことができるよう望んだ。執行人らは信者らが殉死の場へと進む様を見て、理解できなかつた。信者らは自分らを殺そうとしている者らに、お菓子をあげることさえしたのである。

清い心を持ち、偏見がない人々は、このような振る舞いに心を打たれ、「信教」を受け入れるのであった。それに対し、精神的な目が、偏見の暗いカーテンによってさえぎられ、そのような行動について理解できない無知な人々は、執行人に手を貸しさえするのだった。

## 13. バハオラの秘かなる啓示

「言挙げよ――おお、司教たちよ！書簡の中で汝らに約



束されていた御方がやってこられた。神を畏れよ。そして、  
迷信を信ずる者らの無駄な空想に従うなかれ」

バハオラの清い心から、神の靈感の光線が最初に輝きを放ったのは、テヘランの土牢の暗闇であった。首のまわりにつけられた鎖の重みと、土牢の悪臭のため、彼はほとんど眠ることができなかった。

「テヘランの牢獄にいる間、我は鎖の重みと悪臭のためにはほとんど眠ることができなかった。しかし、その時たま訪れる眠りの間、我は、わが頭の上から胸の方へ強大な激流が流れたかのように感じた。それは高い山の頂点から地上へ流れる激流のようであった。そうしてわが身体の肢体は全て、火のように燃え上がった。その時わが舌は、誰も聞くことのできないようなことを唱えたのである」。

それは、重大なる瞬間であった。というのは、その時、バハオラは、人類を救うというきわめて特別で重要な任務を与えられたからである。

しかし、このことを公に宣言する時はまだ来ていなかった。それで、これはバハオラの秘かなる啓示と呼ばれている。1853年のことであった。

時が過ぎ、ようやく、ナーセロッディーン・シャーの命を狙おうとしたあの出来事に、バハオラは何の関係もなかったことが、政府に明らかとなり、彼は釈放された。総理大臣はその代理としてバジ・アリを土牢へ遣わし、バハオラを連れ出すことにした。土牢に入り、バハオラの悲惨な状態を目にした時、バジ・アリの目には涙が浮かんできた。「祝福された美」が足かせをはめられ、重い鎖のために首を傷つけられ、その恐ろしい場所の悪臭を苦しうに吸っているのを、バジ・アリは見たのである。彼はこう叫んだ――「あなたがこのような屈辱的な仕打ちを受けようなど、私は夢にも思いませんでした。それについては神がご存知です。総理大臣がそのような殺人行為を犯そうなど、私には思いもしませんでした」。そして、総理大臣が囚人(バハオラ)に対して発した最初の言葉はこうであった――「私の助言に耳を傾け、バブの信教から身を断っておれば、その様な苦しみや屈辱を味わわずとも済んだのだ」。それに対してバハオラはこうお答えになった――「もしあなたが私の助言に従っていれば、政府の業務はこれほどの危機に達しはしなかったでしょうに」。

この時、大臣はバブの殉死の時にバハオラが自分に言ったことを思い出した――もしこの残酷な行為をやめさせなかったら、その炎はますます激しくなり、状況は悪化するであろう。大臣は恥らいを感じ、こう答えた――「あなたが発した警告は、悲しいことにも実際に起きた。あなたは私がどうするべきだと助言なさるのか」。バハオラはこう答えられた――「国内の知事たち、は罪のない者らの血を

流したり、女性をはずかしめたり、子供らを傷つけたりすることをやめるよう命令しなさい」。総理大臣はこれに従い、あらゆる知事に対して迫害をやめるよう、ただちに連絡を取った。

バハオラが戻って来たのを見て、家族がどんなに喜んだことか。それは神のみがご存知である。子供らは4か月経って最愛なる父親に再会できたので、涙を浮かべて神に感謝した。バハオラの新しい家には、たった二つの部屋しかなかった。それは、かつて住んでいた邸やしきのようなものではなかったが、家族は誰も、それを気にすることはなかった。家族はみな、蛾がろうそくの火の周りに集まるようにバハオラを取り巻き、それぞれ最愛なる「父親」への強い愛を示そうとしたのだ。彼らはみな、その4か月の悲しみを全て忘れてしまったに違いない。アシイ・カヌームは、今やとても虚弱になってしまった「祝福された美」のために、ふさわしい食べ物を用意して、できる限りの世話をしようと努めた。

バハオラは、土牢でのバビ教徒らの犠牲に対して、感謝しておられたであろうか。彼らは、神の道において勇敢に命を犠牲にし、荣誉ある殉死の冠をかぶった。そして彼らは、世界でもっとも素晴らしい贈物であり、神の信教において最も貴重な宝が、神の顕示者を認めることであるのを知っていたのである。それで彼らは、この偉大な大業を信じている、と誇りをもって言うのである。ただし、そのような宣言は、自らの死を意味したのであるが。

## 14. バグダットへの旅

「おお、わが僕らよ！この『泉』の水を飲んだものはみな、すばらしい永遠の生を得、飲むことを拒んだ者はみな、死んだも同然なのである」

バハオラは、土牢から解放された後、イランの国を出て行くように政府に命じられた。それで、彼は、家族のうち何人かと一緒に、イラクへ行くことになった。その旅は長く、厳しいものであった。アシイ・カヌームと幼い二人の子供――9歳のアブドル・バハと7歳のバヒ



ア・カヌーム――それからバハオラの兄弟であるミルザ・ムサとミルザ・ムハンマド・ゴリ、そして忠実なる召使であるイスファンディアがバハオラの同伴者であった。バハオラが一番下の息子マフディは、当時ほんの二歳で、困難な旅であるために、親類に預けられることになった。

その寒い冬、旅がいかに困

難であったことか。特に当時はまだ車や列車もなく、彼らはイラン西部の山々の危険な道をラバに乗ったり、歩いたりして進まねばならなかった。その年の冬は最悪であり、山道は雪でふさがれていた。道が通れるようになるまで、彼らは長い間待たねばならなかった。町に着くとアシイ・カヌームは家族の服を持って公衆浴場へ洗濯に行くのであった。しかし寒さのために洗濯物はなかなか乾かなかった。彼女の繊細な手はひびわれし、荒れてしまったが、彼女は決して不平を言わなかった。彼女は常に愛する者らのためにどうこの旅の負担を軽くできるかについて考えていた。時々、旅の途中の宿でも、ほんの一晚しか泊まることができなかった。

そして、その宿はベッドもなければ明かりもないような所であった。そしてたまに、彼らはいくらかのお茶とチーズ、卵やパンだけ買うことができた。バハオラは病気でとても虚弱だったので、特別な食べ物が必要だったが、そのような食物は一つも手に入らなかった。そしてやっと小麦粉がいくらか手に入ったので、次の宿に着いたら、アシイ・カヌームは、ハルバ(トルコ起源のキャンデー)を作ろうとした。しかし、なんと残念なことか、彼女は暗い中でそれを作らねばならなかったので、ハルバの中へ砂糖を使う代わりにコショウを入れてしまい、誰も食べるができなかった。後にアブドル・バハの回想によると、そのハルバを少し食べたが、彼らの口は一晩中熱かったということである。

3か月にわたる長い旅が終り、彼らはイラクのバグダッドに到着し

た。イランで迫害を受けていた多くの信者らもバグダッドへと向かった。バブが殉死して以来、信者らは、適切な導きがなく、バブに対する信仰が弱まってしまっていた。それで、バハオラはバグダッドに着いてまもなく、信者らを教育し、導くことに努められた。

「祝福された美」にはヤーヤという腹違いの弟がいた。バハオラはヤーヤに愛情と親切を示したにもかかわらず、彼は不忠実であり、利己的で、臆病で、また非常に嫉妬心が強かった。また、他人から尊敬され賞賛されることを欲していた。それで人々が心からバハオラを尊敬し、愛情を示しているのを見ると、ヤーヤの嫉妬心は更に激しくなったのである。

バブが殉死して以来、ヤーヤは殺されるのを非常に恐れていた。彼はダーヴィッシュ<sup>9</sup>に姿を変え、イランの北部にあるマジンダランの山に逃げて行った。彼はそこでしばらくひっそりと暮らし、カーマンシャーへ移った。ちょうどその頃、バハオラとその家族はカーマンシャーを通過してバグダッドへ向かっていた。それを知ったヤーヤは自分もバグダッドへ行くことにした。彼はバハオラにお金を貸してくれるよう頼んだ。バハオラは全ての人に親切であったので、彼にお金をいくらか与えた。ヤーヤは綿花を買い、バグダッドへ行き、そこで数か月間、静かに暮らした。自分ではもはや危険な状況に置かれていないことを確信すると、彼は信者らに会いに行き、自分がバビ教徒らの指導者であることを告げた。しかし、信者のほとんどは、彼

---

<sup>9</sup> イスラム神秘主義の修行者

の言うことに注意を払わなかった。どうして太陽のようにまぶしく輝いているバハオラから顔をそむけ、ろうそくの火よりも劣るヤーヤに従うことができよう。しかし、いく人かは誰に従うべきなのかわからず当惑し、信者らの間に敵意感や騒動を引き起こしていた。

バハオラは、共同体の不和や敵対心の源泉になるのを避けるため、バグダッドの町から出ていくことにした。ある日、彼は誰にも告げず、忠実な信者アブドル・カシムと一緒にソレイマニエの山へ去って行った。それについてバハオラは「ケタベ・イガン」の中で次のように証言されている。

「我が身を引いた唯一の目的は、忠実な者らの間で不和のもととなったり、わが同伴者らに迷惑をかけたり、誰かを傷つけたり、またはいかなる人の心をも悲しませたりしないことであった... 我が身の引退は、帰ることを思うものでもなければ、わが離別は再開を望むものでもなかった」。

これが二年間にわたる隠遁期間の始まりであった。そしてそれはバグダッドに残された者らにとって悲しみの時でもあった。

## 15. ソレイマニエの山々

「言挙げよーおお人々よ！神のランプの火は燃えている。汝らの不従順な激しい風によってその光が消されてしまわぬよう、警戒せよ」

この時代の最愛なる主であるバハオラは、ソレイマニエの山々を避難所の同伴者となされた。その間、彼はダーヴィッシュとして質素な服を着ておられた。彼はダーヴィッシュの杖を手に持ち、荒野へと進んで行かれた。彼はしばらくの間、サル・ガルという名の山に住まれた。ここは人里から遠く離れ、年に二回だけ、農夫らがやってきて畑に種をまくような土地だった。バハオラは農夫らが雨風から身を守るために岩に掘った洞穴の中に住んでおられた。彼がソ



ダーヴィッシュとその弟子ら(1850年頃)

レイマニエの町を訪れるのは、入浴するためだけであった。そして町を訪れた日の晩は隊商宿に泊まり、翌朝早く出て、山の麓までお戻りになるのだった。彼は「ダーヴィッシュのムハンマド」としてあらゆる人に知られるようになったが、誰もこの山に住む質素な「人物」がバハオラであることを知らなかった。

アブドル・カシムは週に一度、バハオラが必要とされる物を集めて持つ

て来た。それらの物を持って来ると、彼はまたソレイマニエへ戻って行った。バハオラの食べ物パンとチーズだけであった。時々、バハオラの住んでおられる所を羊飼いが通りかかると、ミルクをバハオラの所に持って来るのだった。バハオラはそのミルクに米と砂糖を加えて煮て、甘い料理をお作りになった。そしてそのような環境の中で、常に祈りと瞑想のうちに時を過ごされたのである。

ヤーヤの嫉妬心と利己心を思い出すと、「祝福された美」の心は悲しみで一杯になった。また、信者らが和合していないことも悲しみの原因であった。この遠い荒野の地では、町の騒々しい雑音も聞かれることはなく、美しい鳥や山の動物だけが、バハオラの友達であった。

サル・ガルの近くに、ある村があり、ある日、バハオラはその村を通りかかっておられた。見ると、幼い少年が岩の上に座ってしくしく泣いていた。悲しむ者全てをお守りになるバハオラは、その少年を



ソレイマニエにある洞窟。バハオラが身を引いておられた付近。

見て、なぜ泣いているのかと優しい声でお尋ねになった。少年は答えた――「私の先生は書き方が下手だと言って私を罰しました。でも書き方用のお手本がないので、

正しい書き方がわかりません。もう戻りたくありません」。バハオラは父親のような優しさをこめて、もう泣くのはおやめなさいと少年に言い、自分が書き方を教えてあげようと言われた。少年は書き方を教えてくれる、優しく愛情あふれた人物を見つけてとても喜び、バハオラの書かれたものを注意深く書き写した。そして少年は学校に戻り、書いた物を教師に見せたが、教師はいまだかつて見たことのないようなその美しい手本に驚いた。誰がその手本を書いたのかと聞くと、少年は荒野に住んでいるダーヴィッシュが書いて下さった、と答えた。そして教師は、それほど美しい字を書くことのできる人は、ただのダーヴィッシュではない、何らかの偉大なる「人物」に違いないと言った。

太陽とその輝きが創造物の眼から隠されることがありえないように、バハオラの偉大さと栄光も、人々の眼から隠されることはなかった。バハオラは、誰も知らないダーヴィッシュとして山に住んでおられたが、その知識の深さや偉大さは、地方にすぐに知られるようになった。ある者らは彼が予言者であると言い、ある者らはイマームであると言った。あらゆるものがこの人物はただの人物でないと感じ、ソレイマニエの住人らは、老若にかかわらず、彼をとっても尊敬していた。

アブドル・カシムはこの二年間、定期的にバハオラを訪れたが、自分の土地を売って「祝福された美」のためにそれを使いたいと思っていた。それで、ある日、ハメダンへ行く許しをもらいにやってき

た。その帰る途中、彼は山賊に襲われ、ひどいけがを負わされた。さらに持っていた金も全部奪われてしまった。彼は息を引き取る前に彼を見つけた人々にこう言った――もし盗まれた金を取り戻されたなら、それはソレイマニエのサル・グルに住むダーヴィッシュ・ムハンマドに渡すように、と。

バハオラがいない間、バグダッドの信者らの心は落ち着かなかつた。アシイ・カヌームとアブドル・バハは最善を尽くしたが、バハオラの行方はわからないままだった。

アブドル・バハはその時、わずか12歳であったが、ある夜、一晩中、休むことなく祈った。彼は父親が戻って来るよう、神に懇願したのである。アブドル・カシムが死んだのはその翌日の事であった。この出来事と彼が残した最後の言葉は、バグダッド中に広まり、バハオラの家族の耳にも届いた。アブドル・バハは、その偉大なるダーヴィッシュが最愛なる父親に他ならないと悟った。と言うのは、バハオラが家を出て行った時に、アブドル・カシムも姿を消していたからである。アブドル・バハは父親に会って、胸が打たれるような手紙を書き、戻ってきて下さるよう懇願した。信者らもまたバグダッドへ戻って来て下さるよう、それぞれ手紙を書いた。そしてミルザ・ムサは信者の一人と共にそれらの手紙をソレイマニエまで持って行った。何日か捜し続けた後、ついに彼らはバハオラを見つけた。その時、クルディスタンの人々が何人か彼の周りに座っていた。彼らはバハオラから決して引き離されたくないという眼差しで、バハオラを見つ

めていた。

ミルザ・ムサは「祝福された美」の足もとにひれ伏し、手紙を渡し、戻ってきて下さるよう懇願した。バハオラは最愛なる息子アブドル・バハの誠実な懇願の手紙を読み、また、信者らの悲惨なる状態を知り、ついに戻ることを決意なさった。バハオラがバグダッドに戻るという知らせがバグダッドに届くと、信者らの心は喜びと興奮でいっぱいになった。

アシイ・カヌームは、結婚の記念であるとても貴重な生地を使って、美しいコートを作った。子供らは最愛なる父親が帰って来るという知らせを聞くと、二年間の別離のために起きた困難を全て忘れてしまった。バハオラがバグダッドへ戻られたのは、新年の二日前のことだった。冬の寒い風は過ぎ去り、快い春が訪れ、太陽はさんぜんと輝いていた。樹々には葉が青々と茂り、美しい白い花が咲いていた。自然そのものも優美と輝かしさを持ってバハオラを迎えるために、自らを美しく飾っているかのようであった。

そうしてついに、その祝福すべき日がやって来た。バハオラの足音が扉の向こうから聞こえ、「祝福された美」が家に入ってきた。アシイ・カヌームとアブドル・バハとバヒイ・カヌームの喜びをどう表現したらよいであろう。アブドル・バハは父親の所へ走っていき、抱きしめ、離れようとしなかった。アブドル・バハは、もう二度とバハオラをどこへも行かせまいとするかのごとく、彼の手を強く握りしめていた。

バハオラの家族は小さな家で、彼がいなくてどれだけ淋しい思いをしたであろう。そしてアブドル・バハは、バハオラが戻ってこられるよう、神にどれだけ祈ったことであろう。それはまことにすばらしい日であり、他のいかなる祝宴よりも喜ばしいものであった。信者らもその喜ぶべき日には、幸せに満ちていた。

バハオラから二年間引き離されていたことは、あらゆる人にとって良い教訓となった。彼らは今や、バハオラの聖なる存在の価値を知り、信者らの精神的成長のために、彼の教えに従おうとさらに努めるようになったのである。

バハオラは、ソレイマニエから戻られると、信者らへの励ましと教えを始められた。彼の言葉と最高の模範である彼の清き振る舞いは、徐々に、信者らに新しい生命と精神をもたらした。バハオラの家は、あらゆる階級の人々に開放されていた。そして、ムッラーや学者、ペルシャの貴族やトルコ政府の役人などでさえ、バハオラを訪れてきては、新しい宗教について話を聞こうとするのだった。彼らはバハオラに質問を出し、その答えと説明に満足して帰って行った。ソレイマニエにいた時の彼を知っていた人々でさえ、訪れては新たな刺激を受けて帰って行った。

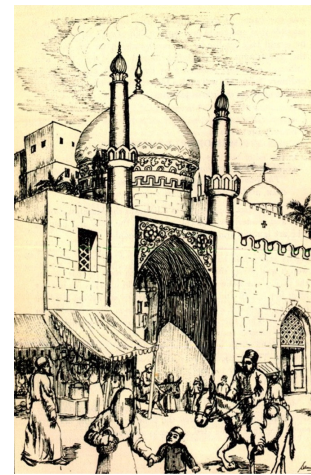
バハオラが戻ってこられたと聞いて、イランのバビ教徒らは、大きな集団で訪れてやって来た。ある者らはバグダッドに居残り、小さな店を開いた。彼らは商いにおいては非常に正直だったので、すぐに人々の信頼と愛を勝ち得た。ある者らはバハオラの手紙を持っ

てイランへ戻って行った。それらの手紙はペルシャの信者らにあてられたもので、彼等の心は再び大業に対する新たな愛のために膨らんだのである。

## 16. 献身と犠牲の炎

「おお人の子よ！ 汝我に会い、わが美を反映するにふさわしくなれるよう、汝の心に喜びを持って」

信者や客がバハオラと会った部屋は小さく、中央の建物の外側に



19世紀当時のバグダッド（想像図）

にあった。それは土と石からできており、とても古く質素なものであった。しかし、バハオラがやって来られると、その部屋はとても神々こうごうしくなり、訪れた人々はできる限りそこに長くいたいと思うのであった。また、その部屋の天井は低かったが、青い空のように広く、輝かしく見えた。この小さな部屋には、ナツメヤシの樹でできた長い椅子があった。バハオラはこの椅子に座って、訪問客に話をなされた。そこにはとて

も快い雰囲気 が漂っていたため、バハオラを訪れたシュジャウド・ドーリ王子は、自分の宮殿の中に同じような部屋を作ることにしたほどである。しかし王子は、その部屋の輝かしさと美しさが部屋の構造によるものではなく、バハオラの存在自体によるものであることがわからなかった。これは家庭の魅力や愛情にあふれる雰囲気が、高価な家具によるものではなく、住む者の有する美しく清い精神によるものであることを示している。

例えば、ある部屋にはアブドル・バハの写真が一枚と、聖なる廟の絵葉書がほんの数枚飾ってあるだけかもしれない。しかし、そこに入ると、アブドル・バハの存在を感じる。それとは反対に、宮殿には高価なじゅうたんや絵画や美しいカーテンがあり、シャンデリアは明るい光を放っているかもしれない。しかし、そこに入っても、とてもわびしく、不快な感じがすることがある。信者らはバハオラのおられる所では、どんなにすばらしい集いやフィーストが開かれたことだろう。彼らは座って祈りを唱え、バハイの歌を歌い、初期の殉死者らが払った犠牲について回想した。それは時々、真夜中過ぎまで続くことがあった。彼らはどれだけバハオラに仕えることを望み、そして、その機会を得た時にはどれだけ喜びに満たされたことか。例えば、バハオラのために井戸から水を汲んで来るという簡単なことでさえ、彼らには喜びだったのである。

バハオラに対する信者らの愛は非常なものであった。ダビイはそのような信者の一人で、とても忠実で、心の清い人物であった。バ

ハオラへの愛は非常に強く、毎朝陽が昇る前に、バハオラの家の前を掃除するのであった。彼は外套のへりを使って塵を全部集め、その塵が他の人たちの足で踏みつけられないよう、チグリス川まで持って行って投げ捨てた。

ある日、ダビイは、バハオラに、自分の家へ来て下さるようお願いした。彼の家はかなり遠かったにもかかわらず、バハオラは恵み深くこの招待を受け入れられた。とても喜んだダビイは家を掃除し、水をまいた。最も偉大で最愛なる「お客」に最善のもてなしをしたいと思ひ、いろいろな砂糖菓子や果物を用意した。そしてバハオラがやってこられた時、ダビイは喜びのあまり、バハオラから目を離すことができなかった。この訪問の後、バハオラへの愛は百倍にも増した。ある日、バハオラの家の前庭を掃除している時、彼は自分のターバンで地面を掃き、自分の心が愛によって二つに引き裂かれそうであったため、泣くのを抑えられないほどであった。この後も、彼の心は、バハオラへの愛のために張り裂けそうであった。彼はチグリス川へ行行って身を投げ、最愛なる御方のために自らを犠牲にしたのであった。

その頃、家におられた「祝福された美」は突然、周りにいた者らにこう言われた——誰かが今、川で、わたしのために命を捧げた。バハオラはその者を連れて来るように言われた。川に着くと、信者たちはダビイが幸せそうに微笑みながら死んでいるのを見つけた。この出来事の知らせはすぐにバグダッド中に広まり、人々を驚かせた。



どうして自分の命を自らの手で奪い取るほどまで、バハオラを愛したのであろう。

この出来事の後、バグダッド政府はバハオラを違った目で見ようになり、彼が並の人間ではないことを知ったのである。彼は、人々が彼のために喜んで命を捧げたいと思うほどの、聖なる「人物」だったのである。

## 17. 記念すべき出来事

「おお汝ら地上の富者よ！汝らの中にいる貧者は、わが信任者である。汝らわが信任する者を<sup>まも</sup>護れ。そして汝ら自身の安楽にのみ熱中するな」(「隠されたる言葉」、ペルシヤ編、#54)

「祝福された美」バハオラは、愛と優しさの顕現であった。その愛と優しさは、特に、ほとんどの人から無視され、さげすまれていた貧しい人々や無力な人々に向けられていた。

バグダッドのある小屋に、80歳になる貧しい老女が住んでいた。彼女はバハオラをとっても愛していたので、バハオラの御顔を見らんがために、バハオラがよく通られた道で待っていた。バハオラは常に立ち止まり、彼女の健康について尋ね、愛を示し、彼女の心を

喜ばされるのであった。彼女が手に<sup>せつぶん</sup>接吻をしようとすると、バハオラはそれを拒まれた。それで彼女は、どうか顔に接吻させて下さいと懇願すると、バハオラはそれをお許しになった。しかし、彼女が高齢のために、腰が曲がっているので、バハオラは背をかがめておやりになった。「私はこの老女を愛している。だから、彼女も私を愛しているのだ」とバハオラはいつも言っておられた。

バグダッドにいる間、バハオラは常にその貧しい独りの老女に、食べ物が十分にあるよう、注意を払っておられた。バグダッドを去り、コンスタンチノーブルへ行くことになった時、バハオラは彼女が亡くなるまで、世話をみられる者を確保するよう、信者に委託した。

これが、真の愛と同情と謙虚さであり、バハオラはそれについて次の言葉の中で語っておられる。

「おお心霊の子よ！貧しき者に汝自らを<sup>ほこ</sup>誇るな。我貧しき者を<sup>みち</sup>道すがら導き、<sup>あ</sup>悪しき状態にある汝を見て、永久に汝を<sup>はず</sup>辱かしむれば」(「隠されたる言葉」、アラビア編、#25)

## 18. 真の樂園

「あなたを認め、あなたの芳香の甘さを味わい、あなたの王国へ向かう者は幸いです」

必ずや道に迷い、滅んでしまうであろう」

バハイの歴史の初期に生きていた著名な歴史家であるナビルも、その頃バグダッドに住んでおり、後に、その栄光に満ちた美しい日々について回想している。

「バハオラの家の前庭は古く、荒れ果てていたが、『祝福された美』がおいでになると、一変してしまうのであった。我々は、いかなる国王も夢に思わぬほどの幸せと平穏で満たされていた。一つの家に住んでいた我々は、最愛なる御方への愛のために我を忘れ、自分と他人の所有物の区別もつかないほどであった。最も立派な服は、バハオラにお会いするという特権を得た者が着た。『祝福された美』の愛は、我々の頭からあらゆる思考と名前をぬぐい去ってしまい、彼の名前と言葉のみを覚えているだけだった。他の事柄により、神の記憶が妨げられた時は常に、我々はお互いに注意して正すようにしていた」。

## 19. 神の保護

「おお生存の子よ！わが愛は要塞である。そこに入るものは守られ安全である。しかしそこに入らず顔を背ける者は

その頃、信者の数は日毎に増していたので、自らをイスラム教の指導者と見なしていた人々は、バハオラの人気がますますよくなっていることを妬んでいた。アブドル・フサインという名のムッラーは特に嫉妬心が強く、バハオラを破局に追いやろうと、バグダッドにいるペルシャの領事に手を貸してもらおうよう頼んだ。そして彼らは、知事がバハオラに対して偏見を持つよう仕向けることにした。しかし、以前バハオラを訪問したことのある知事は、彼らの陰口や悪口を信じようとはしなかった。彼らの邪悪な企みは失敗に終わったのである。

そこで、ペルシャの領事は悪漢を何人か集めて、バハオラを見つけたらすぐに虐待するように言った。彼らの意図はそうすることによって信者らを怒らせ、そうしてバハオラをバグダッドから追い出す口実を作り出すためであった。しかしこれもまた失敗に終わった。バハオラは何も恐れることなく、自由に通りを歩かれた。その勇敢さは、邪悪な企みをしていた者らを驚かせただけでなく、恐れさせさえした。時折、バハオラは立ち止まって、悪漢らに優しい言葉を語られたりした。バハオラの愛情あふれた優しい物腰により、悪漢らは気がひけ、やがて悔い改めるようになった。

この企みも失敗したと知ったペルシャ領事とアブドル・フサインは、別の計画を企んだ。彼らはリダ・タークという名の悪名高き残酷な

殺屋を見つけてきた。ペルシャ領事はこう言った――「バハオラを殺す事ができたら、お前に豊富な報酬を与えよう。その後、お前の身を守ってやろう」。そう言って彼はリダ・タークに馬を一頭と銃を二丁、そしてお金 100 チューマンを与え、できる限り早くバハオラを殺すよう強く言った。

リダ・タークは至る所でバハオラの後をつけ、彼を注意深く見張った。そしてある日、ついに任務を果たす機会がやって来た。バハオラが一人で公衆浴場へ行くということを知ったのである。リダ・タークはついに仕事を成し遂げ、約束の報酬を貰えると思い、とても喜んだ。外套に銃を隠して、彼は浴場に入って行った。バハオラは服を脱いでおられるところだった。リダ・タークが銃を取り出そうとするやいなや、バハオラは顔を上げ、その鋭い、力に満ちた目をリダ・タークにお向けになった。哀れにもリダ・タークの手は震え始め、彼は力をなくした。彼は浴場から立ち去り、血も涙もない殺し屋の自分がどうして、武器も持たない「者」の前で何もできなくなってしまったのか、と不思議に思った。

もちろん、この惨めな男はバハオラが誰なのかについては、何も知らなかった。「祝福された美」は、外見的には、いかなる国の統治者でもなかったが、彼がこの時代の主であり、全てのことを成し遂げる力を持っておられるということを、リダ・タークは知らなかったのである。

しかし、リダ・タークは次にバハオラを見かけたら、今度こそためら

わずに任務を遂行しようと決意を固めた。ある日、バハオラを通りで見かけると、彼は後をつけて行った。もっと静かな所まで来ると、彼はバハオラに近づいて行った。しかし今度もまた、彼は恐れのために圧倒し、手が震え、銃を地面に落としてしまった。バハオラは兄弟であるムサに、銃を拾って彼に渡してあげなさいと言われた。リダ・タークは銃を取り、恥でいっぱいになり、二度と戻ってこなかった。

これはバハオラの命が常に狙われていたことを示す一つの例である。信者らのバハオラへの愛は日毎に増していった。彼らはまだバハオラの地位を知らなかったが、彼はバビ教徒らを導き、保護してくれる「人物」であることは知っていた。

## 20. 人は神を試されぬこと

「おお心霊の子よ！わが第一の忠言はこれである。即ち、純粹にして優しく、また輝かしき心を持って、さらば古より続く不朽にして永遠なる主権は汝のものとならん」（「隠された言葉」、アラビア編、#1）

イスラム教のムッラーや学者らはバハオラの所へ行行って質問する勇氣もなければ、彼の名声と成功が常に増すので黙って見守って

いることもできなかった。ついに、アブドル・フサインの執念により、多くのムッラーと宗教指導者らが集まってきて、バハオラに対して人々の怒りを引き起こすことにした。しかし、そのためにはアンサリの助けが必要であった。アンサリとは、その地域で最も優れたムッラーであり、人々から非常に尊敬され、信頼されていた。それで、彼らはアンサリを話し合いに招いた。しかしアンサリは、彼らの邪悪な意図に気づくやいなや、立ち去って行った。彼はとても理解力があり、公正な人物だったからである。ムッラーたちは、助けが得られず、計画を遂行することができなかったが、あきらめることができず、ムラ・ハサンをバハオラの所へ遣わすことにした。彼は、バハオラに会い、彼の信教が正しいことを証明するために奇跡を起こすことを要請するように言われた。そこでムラ・ハサンは「祝福された美」に会い、いくつか質問した。学識があり偏見のないムラ・ハサンは、ムッラーたちを満足させるために、奇跡を起こしてくれるよう頼まねばならなかった。「祝福された美」はこうお答えになった——これまでの律法時代において、神の顕示者や預言者らは奇跡を行ってほしいという人々の依頼を受け入れたことは決してなかった。しかしこの律法時代では、究極の証明としてそれを受け入れよう。学者たちは集まって、起こしてほしい奇跡の一つを選び、それを書き記して印を押さなければならない。もしその奇跡が起こされたならば、彼らはそれ以上バハオラに対抗してはならず、バハオラの信教が真実のものであることを認めねばならない。もし奇跡を起こすことができな

れば、彼の信教は偽りのものであることになる。

ムラ・ハサンは信者ではなかったが、この答えに満足し、うやうやしくお辞儀をして帰って行った。彼はバハオラのこの言葉をムッラーたちに伝えたが、彼らは「真理」を探求し、見つけ出そうという気はなかった。もしバハオラが奇跡を行ったら、彼らはそれ以上論議を挟むことができず、それを受け入れねばならなくなるだろうと恐れた。それで彼らは計画を変更した——「たぶんこの人物は魔術師かもしれない。もし奇跡が起こされたら、我々は何も言うことができず、服従せざるを得なくなる」。

ムラ・ハサンはムッラーたちのこの不正な行いに腹を立て、彼らが計画を変更したことをバハオラに伝えた。この出来事の後、ムラ・ハサンは、ほとんどの集会で、この話をし、これらのムッラーたちの不公平さと無力さ、そしてバハオラの大業の威厳と力と真実性について語った。この話は、心の清い者らに影響を及ぼし、彼らがバハオラについてより深く知り、理解することにつながった。

ムッラーやバハオラに対抗していた全ての人々の長<sup>ちよう</sup>であるシェイクは、国王シャーの注意を引きつけようとした。彼らは、バグダッドでのバハオラの影響力と人気についてシャーに知らせ、警戒心を持たせようとした。シェイクは、国王の側近に偽りの手紙を書き、バハオラが国王に忠実でないと行って非難した。彼はまた、バハオラに会うため、イランから大勢の人々が訪れ、日毎に信奉者が増していること、そして彼らがバハオラのためには喜んで命さえ捨てようと

する事も伝えた。こうしてシェイクは、国王の警戒心を引き起こす事に成功した。国王は、オットーマン帝国のスルタンであるアブドル・アズィーズに手紙を何通か書き、今度はバハオラをコンスタンチノーブルに追放するよう促した。

バグダッドの知事であるナミク・パシャは以前、何回かバハオラに会ったことがあり、バハオラの愛に非常にひきつけられていた。彼は、バハオラをコンスタンチノーブルへ追放する命令を5回繰り返し受けていたが、「祝福された美」への愛がとても強かったので、3か月間、その命令を無視していた。しかし結局、ナミク・パシャは、代理を通して命令をバハオラに告げなければならなくなった。彼は、自分がバハオラにバグダッドに居残ってもらいたいことを心から願っているが、ナーセロッディーン・シャーからの圧力により、この追放命令が出されたことを伝えた。仕方なく、こうせざるを得なかったので、ナミク・パシャはバハオラの許しを請うた。

「祝福された美」は、もちろん命令に従うと言われ、非常に落ち着いて、また自信を持って、命令を受け入れられた。しかし、家族や友人らも同伴しているので、旅の準備に一月間与えてほしいとお尋ねになった。バハオラはそう簡単にこの命令を受け入れないだろうと思っていた代理人は、とても驚いた。バハオラのこの落ち着き、超脱した態度により、代理人の、バハオラへの愛と尊敬の念はさらに増したのである。

アシイ・カヌームと子供らは再び、長い旅に備えなければならなく

なった。しかし、今回は、子供達はもっと成長していた。アブドル・バハは19歳、バヒイ・カヌームは17歳、そしてミルザ・ミフディは13歳であった。

## 21. バハオラの使命宣言

「まことに彼は、王国と共にやってこられた。そしてあらゆる原子は大声で叫んでいる——見よ、大いなる威厳をもって主はやってこられた」

バハオラがまもなくバグダッドを去るという知らせはバグダッドの町中だけでなく、周辺の地域まで、すぐに広まった。人々は10年以上の間、常にバハオラからの愛と恩恵を受け、バハオラの導きのもとに、いわば苗木から若木になるまで成長したのであった。従って、この知らせは人々の間に大きな騒動を引き起こした。10年間に困難や苦しみを味わった者はみな、バハオラのみを避難所としていたからである。

貧乏と空腹で悩まされていた貧しく無力な者らはみな、全ての者のために扉を開放している小さな家の一つだけ、バグダッドにあることを知っていた。その家の主は、いついかなる時も彼らを愛情深く迎え入れ、悲しむ者を慰め、悲しみを喜びに変えてくださった。ま

た、たとえ少量のパンやナツメヤシの実であっても、自分が持っているもの全て、分け与えてくださったのである。しかし、聖なる「父親」がまもなく町を出ていかれるのである。ああ、なんとということか！彼らにどうしてこの離別が耐えられようか。あふれんばかりの愛を、誰が代わりに与えてくれるのだろうか。それほど愛する御方から引き離される事は、とても絶えがたい、つらいことであった。

大勢の人々は、別れを告げるためにやって来た。バハオラの家は小さかったので、やって来た人々を全て入れることができなかった。バグダッドの高貴な人物であるナジブ・パシヤはこのことを知り、バハオラが人々を迎えられるよう、自分の庭園の使用を提供した。この親切な行為に対して、友人や信者らはどれだけ幸せに思い、神はどれだけ喜ばれたであろう。ナジブ・パシヤの名前は、この時なされたバハオラの使命の宣言と永遠に結びつけられるであろう。

バハオラがバグダッドから出発した日は、まことに忘れる事のできない日となった。老若男女、貧富、階級の差にかかわらず、あらゆる人々が次から次へと、バハオラの家へやって来た。その中には、王家の王子や政府の役人らも含まれていた。みな、バハオラに別れを告げるためにやって来たのである。彼らは、バハオラがやってこられる道の脇に並んでいた人々は、その姿をよく見れるようにと、屋根の上に登る者もいた。

バハオラが家から出てこられた時、人々は感情を抑えられず、泣き始めた。それは、心動かされる光景であった。突然、幼い男の子

が前に出てきて、バハオラの外套がいたうの裾すそにしがみついて泣き始め、行かないでほしいと懇願した。この光景は、石のような心をも溶かしてしまうような、心揺さぶるものであった。それまで涙をこらえていた者らも、この時は我慢できず、恥も捨てて号泣ごうきゆうした。バハオラが、間もなく去ってしまわれるなど、誰も信じるができなかった。「祝福された美」も、この離別のために悲しんでおられた。さらに、あらゆる者の悲しみをさらに増すような、奇妙な出来事が起きた。ペルシヤの高貴な女性が一人、群衆の中から抜け出してきて、バハオラの所へやって来た。そして、自分の息子を犠牲として受け入れてもらえるよう嘆願したのである。

このように、バハオラがチグリス川のほとりに着かれるまで、その間中、バハオラの所へやってきては、自分なりに愛を示した。ある者は、バハオラの足もとにひれ伏し、足に接吻した。ある者は、バハオラに抱きしめてもらうことを望んだ。このような日は、それまで世界で見られたことはなく、これからも見られることはないであろう。

ついに、バハオラがチグリス川に着かれ、そこで皆に、最後の別れを告げられた。群衆の目はバハオラに向けられ、みな、自分の魂を慰めてもらおうと、最後の言葉に耳を澄ましていたのである。

バハオラは、人々に向かって、こう言われた——「おお、わが友人らよ。私は、このバグダッドの町を、あなたがたの手中しゅちゆうに委ねよう。今この時、友人も、また見知らぬ人らもみな、屋根の上、通り、市場に群れを成して集まっており、涙を雨のように流している。私はあな

た方から去っていく。この町に住む人らの胸に燃え上がる愛の炎を、自らの振る舞いや行動によって弱めてしまわぬよう、気をつけなさい」。そう言われると、バハオラは舟に乗り、川の反対側にあるナジビイの庭園と向かわれた。

「栄光の王」が庭園に入られると、午後の祈りの合図が寺院から発され、「アラホ・アクバー」(神は偉大なり)の言葉が庭園の至る所で聞かれた。この庭園が、バハオラの使命の宣言という最も神聖なる出来事が起きる場所なのである。

バハオラが、ナジビイの庭園に行かれたのは、1863年の4月のことであった。彼はそこに12日間滞在なさり、歴史上かつてない、偉大にして深遠なる使命の宣言をなさったのである。「祝福された美



レズワンの園(想像図)

は、その忘れることのできない日に、自らが神の顕示者であること、世界中のあらゆる聖典の中で約束されて来た、あの偉大なる教育者であることを<sup>おおやけ</sup>公に宣言なさったのである。彼こそは、唯物主義と不信の暗黒に浸ってしまった人々のために、日に日に悪化する精神的な病気を癒す、いわば聖なる医師なのである。この宣言は、友人らの間に新たな希望の光をもたらし、彼らは確信を増した——バブ

が殉死されてしばらくたった今も、神の大業には「導き」があるのだということ。この庭園は後に、「レズワンの園」として知られるようになった。

バハオラがレズワンの園におられた12日の間、多くの信者や人々が、バハオラにもう一度会おうと訪れて来た。その中には、バグダッドの知事であるナミク・パシャもいた。彼は、バハオラが去っていかれることを非常に悲しんでいた。彼は、この旅の間、バハオラに同伴する者として、役人を一人任命し、あらゆる統治者宛てに手紙を書き、バハオラに最高の敬意を示し、もてなすよう、統治者らに願った。ナミク・パシャはバハオラへの好意として、何かできるものがあるなら、そう命じて下さいと請うた。彼が何度も懇願すると、ようやくバハオラは、信者らに愛を示し、世話をみてほしい、と言われた。ナミク・パシャは、この勧告を誠実に受けとめ、約束を守った。

レズワンの園にいたバハイの著名な歴史家ナビルは、こう記している——「毎朝、夜明け前に、庭師らが4列になって、嘆き悲しむバラの花を摘んでは、バハオラの聖なるテントの床の真ん中に置いていった。バラの花は、山のように積み重ねられた。バハオラの同伴者らが朝集まって、バハオラと一緒にお茶を飲む時、バラの束の向こう側にいる友人たちの顔が見えないほど、たくさん積み上げられていた。バハオラは、これらのバラを全て、ご自身の手で毎朝、同伴者らにお渡しになり、バグダッドにいるアラブ人の友人らの所に届けるよう、委託なさった」。さらにナビルは、こう書いている——

「ある満月の夜、9日目のこと、私はたまたま、バハオラの聖なるテントの側で夜警をしていた。真夜中になる頃、私はバハオラがテントから出てこられるのを見た。彼は同伴者の何人かが寝ている所を通り過ぎていかれた。そして月光に照らされ、花壇で縁どられた庭園の中を歩き始められたのである。小夜鳥さよどりはいたる所で鳴いており、鳴き声があまりにも大きいため、バハオラのお側にいる者たちだけが、お声をはっきりと聞き取ることができた。彼は歩き続けておられたが、庭園の並木道までさしかかるところ 言われた 『この小夜鳥さよどりたちのことを考えてみよ。これらのバラの花への愛があまりに強いため、これらの小夜鳥は日暮れから夜明けまで眠ることができず、メロディーをさえずっては、崇敬する『御方』と語り合っているのである。それではどうして『最愛なる御方』の、バラのような美によって燃え上がっていると称する者らは、眠ることができるであろうか。』  
三日三晩みっか みぼん、私はバハオラの聖なるテントの番をし、その周りを歩き回った。バハオラが横になっておられる寝いすを通りかかるたびに、バハオラが起きておられるのがわかった。そして毎日、朝から晩まで、バハオラは、バグダッドからやって来る訪問者らと常に、お話をなさっておられた。私は一度も、バハオラの言葉の中に、感情の偽りを見出だすことはなかった」。

この12日のうち、第1日目、9日目、そして12日目の3日は、バハイにとって特別で神聖な日である。1日目に、バハオラは使命の宣言をなさり、9日目にはご家族が彼に加わった。9日目は、川もその

日々の偉大さを感じてか、水量みずかさが増し、誰も川を渡れないほどになった。そして12日目、バハオラはご家族や友人らと共に、レズワンの園から出ていかれたのである。

その使命の宣言の重要性については、バハオラ自身、啓示なさっておられる。バハオラは、この歴史的出来事を、「最も偉大なる祝祭」、「祝祭の中の王ともいべき祝祭」、「神の祝祭」などと呼んでおられる。「ケタベ・アグダス」では、「全創造物が浄化の海に浸った」日として述べておられる。

## 22. コンスタンチノーブルへの旅

「あなたの御名の力によって武装した私は、何ものにも傷つけられえず、あなたの愛を心に抱いた私は、世界のあらゆる苦しみによっても、不安を感じる事はありません。」

5月2日の事であった。この日、バハオラは、コンスタンチノーブルへ向けてレズワンの園から出発されることになっていた。人々は再び興奮し、多くの人々がバハオラの進まれる道のわきに並んだ。彼らは、バハオラに対して心からの愛を示したので、バハオラを見送りに来た著名な人々はとても驚いた。



それは牧草地や田園が美しい春の日であった。新鮮な野生の花は微風に揺れ、主なるバハオラに頭を垂れているかのようであった。「祝福された美」がレズワンの園から出発される時には、ちょうど到着された時のように、アドハンの合図<sup>10</sup>が再び聞こえていた。それは威厳に満ちた光景であった。バハオラは、友人らが「最愛なる御方」のために用意した赤い<sup>あしげ</sup>葦毛の種馬に乗っておられた。横にはアブドル・バハが馬に乗っておられた。また、これらの聖なる旅人の同伴者として、友人らが26人、バハオラの護衛の兵士が10人と役人が1人おり、さらに50頭のラバと7対のハウダー<sup>11</sup>も用意されていた。この旅行隊は、美しい緑の谷や牧草地を進んで行った。夜には空に星が美しく輝き、道を照らした。これらの星は、まるで「栄光の王」の軍隊のようであった。

コンスタンチノーブルへ行く途中、町や村の著名な人々は、バハオラに大いなる敬意を示した。ある時は、バハオラを迎えるために祝宴が開かれることさえあった。ある朝、バハオラとその一行は、マルディンという町にやってこられた。何人かの騎手が旗を持ち、太鼓をたたきながらやってきて、バハオラを迎えた。人々は、バハオラを迎えるために通りや屋根の上に群がった。そして彼らは、この道は国の著名な人々や役人が通ることはあるが、いまだかつて、これほど素晴らしい「人物」が通ったことはない、と驚きを示しながら言

<sup>10</sup> 1日5回あるイスラム教のお祈りの前に出される合図の呼び声

<sup>11</sup> 馬やラバの背の上のせた特別な席(輿)

った。

この旅の終りには、黒海を三日かけて船で渡らねばならなかった。全部で110日にわたる旅であった。

コンスタンチノーブルは、オットーマン帝国の首都であった。当時、バグダッドやアドリアノーブル、そしてイスラエルさえもこの強大なる帝国の一部であった。

バハオラと一行がコンスタンチノーブルに着いた時、港には特別な馬車が二台用意されており、市内のある著名な人物の家まで送迎するように手配されていた。その人物は、バハオラと一行をもてなすよう、政府



コンスタンチノーブル

から正式に任命された人物であった。しかしバハオラは、コンスタンチノーブルにほんの4か月しか滞在されなかった。というのは、やがて、さらにアドリアノーブルへの追放命令が出されたからである。

命令がバハオラに伝えられると、バハオラは厳しい警告の書簡を啓示なさり、印を押してオットーマン帝国の総理大臣にお送りになった。書簡を渡すよう委託された使者は、書簡を手渡した時の状況を、次のように語っている――「書簡の内容を私は知りません。総理大臣は、それを読むと顔が蒼くなり、死人のように見えました。そしておっしゃいました――『この書簡は、あたかも全能なる国王が

臣下の振る舞いや態度について叱りつけている時のような文体である』。

バハオラはコンスタンチノーブルから発たれる前に、ペルシャの大使に宛ててメッセージをお送りになった。大使は、バハオラを滅ぼそうと、あの手この手を使い、権威者らの前でバハオラに悪態をついていた。大使にあてたメッセージの内容は、おおよそ次の通りであったー彼は毎年、様々な口実を用いては何人もの罪のない人々を殉死に追いやった。彼や、彼と同じようなことをする者はどうやって、このような敵意ある行為から益を得るといのか。

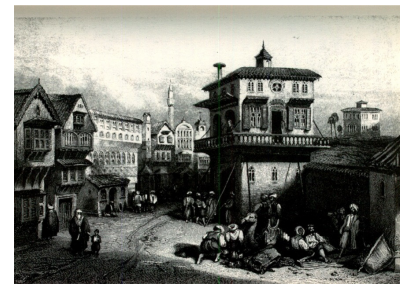
神の大業は、日に日に進歩していくであろう。世界の国王や統治者たちが団結して、あらん限りを尽くして、バハオラと信奉者らを抑えつけようとしても、彼らは信者らの心に灯された愛の火を消す事は、決してできないであろう。

### 23. アドリアノーブル

「おお助けられた見知らぬものよ！ 汝の心の蠟燭は、わが権威の手で灯されている。自我と情欲の逆風もてそれを消すな…」（「隠されたる言葉」、ペルシャ編、# 32）

バハオラと聖なる家族は再び、長い困難な旅をせねばならなかつ

た。今度は冬の旅となり、寒さは一段と厳しく、オットーマン帝国内では、動物が凍死するほどであった。年老いた人々も、これほどの極寒と雪に出くわしたことはないと言った。人々は水を手に入れるために、泉のまわりに大きな火を焚きつけ、氷を溶かさねばならなかった。それほど寒さは厳しかったのである。そのような天候の中、バハオラたちは寒い夜も、旅せねばならなかった。この旅はまことに困難であった。



多くの困難に満ちた、耐えがたい12日間の旅の後、ついにバハオラの一行は、アドリアノーブルに到着した。バハオラは、極寒のために持ち主が出て行った家に連れ

ていかれた。家には、暖房設備が整っていなかった。その時、彼らがどれだけ苦しんだかは、言葉に表現できないほどである。

不正で残酷な統治者らや、偏見のある人々は、どうしてバハオラがそのように苦しんでいるのか、豪華で安楽な生活が突然終り、なぜこのような悲惨な目に遭っているのか、誰も気にならなかった。それは、バハオラが、天なるメッセージにより、人類を不正や残酷から救い、敵意や憎悪や邪悪の代わりに愛と調和と平和を行き渡らせたいと望まれたからではなかろうか。

ペルシャとオットーマン帝国の二人の無  
知な国王は、ムッラーやイスラム教の指導  
者らに勧められて、この大業の光を消し、  
滅ぼすために団結した。

彼らは、今、世界の至る所で大勢の  
人々の清い心が、バハオラの愛によって  
鼓動しているのを見ることができない。そし  
て、とても小さく遠く離れた島々や村でさ  
え、家の中にはアブドル・バハの写真が飾  
っており、バハオラの愛はその住民らを  
明るく照らしている。

バハオラがアドリアノーブルに到着されて間もなく、そこの住人ら  
は、彼の偉大さを認め、彼に心からの愛を感じた。「太陽」を小さな  
部屋に閉じ込めることができようか。もしそうだとしたら、アブドル・ア  
ズイーズは、この「真理の太陽」を、バグダッド、コンスタンチノープ  
ル、アドリアノーブル、そしてアッカへ投獄することによって、邪悪な  
企みを遂行できたはずである。知事を含めて、アドリアノーブルの  
重要な人物たちは、並外れた「来客」についてしきりに知りたがった。  
彼らは、そのような「人物」をかつて見たことがなかった。彼らはま  
もなく、バハオラが全ての知識の源であり、あらゆる美德の具現者で  
あることを知った。



アブドル・バハ

## 24. シシュマン医師の犠牲

「おお人の子よ！わが美にかけて誓う！汝の血もて汝の  
毛髪を染めることは、わが眼には宇宙の創造よりも、二つ  
の世界の光よりも偉大である。されば、それに到達せんと  
努めよ。おお僕よ！」

バハオラがソレイマニエの荒野から戻ってこられて以来、ヤーヤ  
は身を隠し、町から町へと移って行った。彼は逮捕されることを恐  
れていたため、自分を知っていると、見たことがあると言う者は呪  
われるぞ、と仲間たちに言った。バハオラがコンスタンチノーブルへ  
旅することを知ると、ヤーヤはバグダッドの郊外にある庭園に身を  
隠し、バハオラの望みに反して、バハオラの一行に加わり、一緒に  
コンスタンチノーブルまで行った。

バグダッドを発つ時、ヤーヤは人々がいかにバハオラに対して深  
い愛情を持ち、またどこへ行っても「祝福された美」はあらゆる人か  
ら崇敬されるのを見た。ヤーヤはどんなに地位が高く、権力ある者  
をも恐れなかったバハオラの勇氣と力を見た。身分の高い役人ら  
でさえ、バハオラの前に出ると、非常な敬意と謙虚さを示したので  
ある。これらのことを見たヤーヤの心は、憎悪と嫉妬心で満たされ  
た。それはちょうど、自らの心と魂を病気にしてしまった、毒ヘビの  
ようであった。彼は、この危険で、全てを焼きつくしてしまうような毒

のために、身もだえした。彼は安らぐことも、くつろぐこともできないほどであった。唯一の望みは、毒をなんとかして「祝福された美」に向けて吐き出すことであった。ヤーヤは、自分や隣人のために、世界を改善することや、人類のために奉仕することなど考えもしなかったのである。彼は、指導力を握り、バハオラに対する敵意感を生じさせることのみ考えていた。この邪悪な望みをかなえるため、ヤーヤは惨めな人生の中で最悪の罪を犯してしまった。彼はバハオラを自分の家に招き、毒の入ったお茶をバハオラに飲ませたのである。バハオラはそのため、高熱を出され、重体になられた。外国人医師であるシシュマンという人が呼ばれ、バハオラの様態を診たが、青ざめた顔を見て、もう望みはないと思い、バハオラの足元にひれ伏してしまった。そうして、何も言わず、処方することもなく、涙を流しながら、彼は家を出て行った。それから数日後、シシュマン医師は奇妙な病気にかかり、亡くなったという知らせが届いた。彼が亡くなる前、バハオラは、シシュマン医師は神の道において命を犠牲にしたとおっしゃり、友人に彼の健康について尋ねるよう頼まれた。記録によれば、シシュマン医師は、「祝福された美」の犠牲として自分の命を受け入れて下さった神に感謝していたということである。

バハオラのご家族は、もう一人優れた医者を呼んで診てもらった。神のみ恵みにより、「祝福された美」は回復された。しかし、毒の影響はあまりにも強かったため、バハオラの手は、亡くなられるまで震えが止まらなかった。ヤーヤは、自分もった毒の効果に恥を感じ

ることもなく一部始終を見ていたのだが、心はまだ満足していなかった。彼は次に、飲料水が貯えてある水桶に毒を入れる事により、バハオラを殺そうとした。そのためにバハオラの家族はみな奇妙な病気にかかって苦しんだ。

このような出来事により、「祝福された美」が次の「隠されたる言葉」の中で言おうとなさっていることがわかるであろう。

「おお地の子よ！まことにこれを知れ。少しでも妬<sup>ねた</sup>みが残っている心は決してわが永遠の領土に達することを得ず。またわが聖なる王国から香り出ずる神聖の甘き香りを吸うこともできず」。

## 25. 邪悪な企み

「自らを廉直<sup>しんずい</sup>の神髓<sup>ころも</sup>の衣で装い、自らの心には神以外の何ものを恐れさすな」

ヤーヤの心は妬みによって暗くされ、唯一の目標と望みはバハオラを傷つけることにあつた。そうして彼は次に、この邪悪な行為をなすために、ウスタド・ムハマンド・アリ・イ・サルマニという人物の助けを借りることにした。

当時、慣習として、人々は公衆浴場で水浴し、何時間もそこで話をしては、情報を交換した。浴場には、ヘンナという染料を髪にあてたり、髭<sup>ひげ</sup>を剃ったりする世話人<sup>せわびと</sup>が働いていた。重要な人物はしばしば、自分自身の世話人をかかえていた。このウスタド・ムハマンド・アリ・イ・サルマニという人物は、バハオラの世話を仕えていた。

サルマニは、次のように回想している。ある日、浴場で、バハオラが来られるのを待っていると、ヤーヤがやってきて、身体を洗い、ヘンナをつけ始めた。その世話をしようと彼の横に座ると、ヤーヤは話を始めた。ヤーヤは話を通して、間接的に、バハオラを殺す事を彼に勧めた。サルマニはこう記している。

「この出来事は、私の心を大変掻き乱し、かつてなかったほど、自分が粉々<sup>こなこな</sup>にされる思いがした。それはまるで建物が自分の頭の上に落ちて来るかのようであった。私は恐ろしくなり、一言も言わず、その場を去って待合室へ行った。私の心は不安でいっぱいになり、浴場へ戻ると、非常な怒りを覚え、ヤーヤに向かってこう怒鳴った――『出て行け、消え失せろ！』。彼はすすり泣き、震え始め、水をかけてくれ、と頼んだ。私は水をかけてやった。彼は大変警戒して出て行き、それ以来私は彼を見かけていない。しかし、私の心は、なだめることのできない状態にあった。

その日、バハオラは浴場にいらっしゃらず、ミルザ・ムサがやって来た。私は、ヤーヤの邪悪な企みに怒り狂ったことを彼に話した。するとミルザ・ムサは、こう言った――『彼はこの事をもう何年も考えているし、ずっとこんな状態だったのだ。相手にしない方がいい』。彼は全て無視するようにと助言し、風呂に入った」。

「しかし私は、仕事が終わると師(アブドル・バハ)の所に行って、ヤーヤが言った事を話した。私はまだ怒りでいっぱいだった。彼はこう言われた――『これは、あなただけが知っていることだ。誰にも言うてはいけない。誰にも知られないままの方がよい』。私は、それからミルザ・アカ・ジャンの所へ行き、その出来事について詳しく話し、バハオラに話してくれるよう頼んだ。彼が話をしてくると、バハオラは、私がそれについて誰にも言わないようにしなさいと言われたということであった」。

結局、サルマニはこの出来事について黙っておくことができなかった。やがて、この話は広まり、アドリアノーブルの信者らの心に恐れと悲しみを引き起こしてしまった。

## 26. 真実と偽りの区別

「おお、すばらしき幻影の子よ！我汝のうちに、我自身の聖霊を吹き込んだ。汝わが愛する者とならんがために。汝何故に我を見捨て、我より他に愛するものを探し求むるや」

真実を偽りから引き離し、ヤーヤの高慢で恥ずべき行為を終わらせる時がやって来た。「祝福された美」は自らの使命の真実性をヤーヤの前ではっきりと告げる事をお望みになったのである。バハオラは、新しく啓示された「スーラ・イ・アムル」という書簡の解説を、友人を通してヤーヤに送り、ヤーヤがバハオラの地位を信じるのか、否定するのかははっきりするようになさった。解説書の中で、バハオラは自らが、「神が顕現なし給う者」であることを述べられた。それは最愛なるバブが予告した、あらゆる時代の約束された御方に関する「人物」のことであった。

その解説書を読んだ後、それについて考えるためにヤーヤは一日欲しいと言った。しかし、その後に彼が考えていたことは、自分はバブの後継者だということであった。この時、バハオラは、それまでヤーヤと一緒に住んでいた家から別の住まいに移り、ヤーヤとその友人らを、バハイたちから切り離されたのである。そうして、何人か残っているヤーヤの信奉者らは、「アザーリ」と呼ばれるようになり、バハオラの誠実なる信奉者らは「バハイ」として知られるようになっ

た。

その後、ヤーヤはバハオラに近づくことはできなかった。しかし、なおも、バハオラの中傷をやめなかった。ヤーヤは、もしバハオラの主張が正しいのなら、彼は対決すべきである、と人々に言った。当時「対決する」ということは、同じ主張をする二人が観衆の前に出て、自分の主張を述べ、相手を呪い、相手を罰するよう神に請うような行為を意味していた。その挑戦がバハオラに出されると、バハオラはそれをお受け入れになった。しかしこれは、バハイではない普通の素朴な人々の心から、あらゆる疑惑を取り除きたいと望まれたたからである。それで、バハオラは、真実が偽りから区別されんがために、対決をするため、スルタン・サリムの寺院に来るよう、ヤーヤにお知らせになった。

約束の日が来ると、バハオラは、非常に暑かったにもかかわらず、ただ独り歩いて、町から少し離れた所にある寺院へ行かれた。この知らせが広まると、イスラム教徒やキリスト教徒やユダヤ教徒など、あらゆる宗教の信者が、この対決を見るために大勢で寺院へと急いで行った。

大衆は通りに群れをなした。バハオラの威厳と偉大さ、そして寺院の方へ進みながら唱えておられた彼の言葉のために、あらゆる者は自然と頭を下げ、彼のために道を譲った。

しかし、バハオラが寺院に着かれた時、臆病なヤーヤの姿はどこにもなかった。あるバハイがやってきて、ヤーヤはその日は来られ

ないと言い、一日か二日後に対決したいと言っていることを告げた。

「祝福された美」は家へ戻られると、すぐに書簡を記され、ヤーヤは自ら別の日を決めるべきであると述べられた。しかし、ヤーヤは、この書簡に返事をしなかった。バハオラは、人々、特にバハイ以外の人々の心から、あらゆる疑惑を取り払うために、それから三日続けて寺院に行かれた。しかしヤーヤの姿は見られなかった。あらゆる人が、この出来事を目撃したが、それは結局、バハオラの威厳と偉大さをより引き立てる事になった。

## 27. 国王や統治者への宣布

「おお地球の国王らよ、汝らは臣下にすぎない。王の中の王なる御方が、最も素晴らしい栄光に装われて現れ、危難の中の救いにして自力で存在し給う彼ご自身のもとへ汝らと呼ばい出しておられる。

「立ち上がり、全ての国の望みなる御方のために仕えよ。その御方は、ご自身からの言葉により、汝らを創りたまひ、常に彼の主権の象徴となるよう、汝らを定め給うたのである」

19世紀の国王のほとんどは、専制的な統治者で、人民に対して完全な支配力を有していた。彼らが命ずることにはすべて従わねばならなかった。そのような時、アドリアノーブルにおられた「祝福された美」は、人類への愛と、邪悪な統治者から人々が解放されるようにという望みから、当時、最も力のあった国王や統治者らに宛てて書簡を送られた。バハオラは、彼らがバハオラの信教を受け入れ、世界の人々に対して正義と公平を守り、戦争や流血を避けるように言われた。また、彼らが権力や力を全て、人民への奉仕のために用い、政府と統治される者らとが蜂蜜とミルクのように完全な調和のうちに生きるように言われた。

バハオラが書簡を宛てられた主な国王や統治者には次のような人物があげられる。

1. フランスのナポレオン3世
2. 英国のビクトリア女王
3. プロシアのウィリアム1世
4. ロシアのアレキサンダー二世
5. イランのナーセロディーン・シャー
6. オットーマン帝国のスルタン・アブドル・アズィーズ
7. ローマ法皇ピウス9世

1. フランスのナポレオン3世

ナポレオン3世は、バハオラから書簡を受け取った西洋で最初の人物である。書簡は、バハオラの大業を受け入れ、人類に仕えるために立ち上がるよう、ナポレオン3世に呼びかけている。ナポレオンは最初、フランスの大統領であったが、とても野心が強く、死ぬまで国を統治できるよう、自ら皇帝であると宣言した。ナポレオンは、オットマン帝国と力を合わせ、ロシアに対抗した。黒海に溺れ死ぬ罪のない人々の叫びによって、夜明けに目を覚ました彼は、残虐な統治者らの行為を阻止するために武器を取るよう強いられたのである。



(上段:左より) ナポレオン 3 世、ビクトリア女王、ウイルヘルム 1 世、アレキサンダー 二世  
(下段:ナーセロディーン・シャー、スルタン・アブドル・アズィーズ、ピウス 9 世)

そのような時、神はナポレオンを試し、彼が本当に人々に同情しているのか、それとも他に動機があるのか示そうとなさった。

バハオラは、アドリアノーブルでナポレオンに宛てて書簡を啓示なさり、次のように言われた――暴君たちが正義を示し、貧しい者らが苦しみから解き放たれる事を望むナポレオンなら、正義のために立ち上がって戦うために一日でも待てないであろう。したがって、彼はこの「虐げられた者」(バハオラ)が25年の間、いかに迫害のために苦しんだかを目にするために来るべきである。

この書簡を受け取った時、ナポレオンはそれを無視したと言われている。「祝福された美」は、アッカから彼に宛ててもう一通、書簡を送られた。その書簡でバハオラは、ナポレオンがただちにそのやり方を正すべきであること、さもなくば苦しむであろうという警告を出された。「我には、屈辱が汝の後を急いで追いかけているのが見える」と、バハオラは付け加えられた。この二番目の書簡で、バハオラは、非常に厳しい言葉を使っておられたが、ナポレオン3世はこの書簡も無視してしまった。

奇妙なことに、この二番目の書簡が啓示されてから一年ほどたった1870年に、フランスとドイツの間に戦争が起こった。ナポレオンは勝利を確信していて、誰も、ドイツに勝ち目があるとは思わなかった。しかし、戦争が始まった最初の月に、フランス軍は敗北し、2万4千人のフランス兵士らは、ドイツ兵によって取り囲まれたのである。この思いがけない敗北に直面したナポレオンは、自ら、ドイツの



総理大臣であるビスマルクの所へ行き、降参し、世界を驚かせた。フランス人たちはナポレオンをあざけり、憎むようになり、彼を滅ぼそうとした。それから3年後、囚われの身となり、屈辱を受けた無力なナポレオンは、この世から去って行った。これが、バハオラの書簡に対して「つまらぬ事で我をわずらわすな、世界は危うい状態にあるのだから」と答えた強力な皇帝の運命であったのである。

## 2. 英国のビクトリア女王

バハオラはまた、英国のビクトリア女王にも書簡を送られ、バハオラの信教を受け入れるように言われた。書簡の中でバハオラは、奴隷制度をやめさせた彼女を誉め、その努力を称えられた。人類の幸福のためになされたこの行為は、他の国々が彼女を見習い、困難と惨めのうち<sup>に</sup>人生を所有者のために奴隷として過ごさねばならない、罪なき人々を解放させる刺激剤となった。また、バハオラは、世界の混乱した状態や、貪欲な国王らによる無意味な戦争や闘争によって引き起こされた荒廃状態に、嫌悪感と悲しみを示された。彼は、これら全ての病<sup>やまい</sup>を治せる唯一の治療薬は、神が人間に命ぜられたことだけであることを指摘なさった。つまり、世界中のあらゆる民族が和合し、共通の信教を信じる事が必要なのである。人類世界は病によって苦しめられている身体のようなのである。その治療は「聖なる医師」の手中にあり、その「医師」は、神の顕示者自身に他ならないのである。

ビクトリア女王は、バハオラの書簡を非常な敬意を持って受け取り、次のように話したと記されている――「もしこれが神から来たものであれば、持続するであろう。そうでなかったとしても、何の害はない」。彼女は、公正な振る舞いによって長い間統治し、63年後、英国の力が最高潮に達した時、栄誉と威厳のうちにこの世から去って行った。彼女は、その時代、最も愛され、尊敬された統治者で、今でも、その善良さは記憶されている。ビクトリア女王の孫にあたる、ルーマニアのマリー女王は、バハイ信教を受け入れた最初の女王であることも、興味深い事実である。マリー女王は、世界的に有名な雑誌で、バハイ信教についていくつかの記事を書き、信教を広めることに貢献した。

バハオラは、警告の言葉を含んだ書簡を他の統治者らにも送られた。しかし彼らはみな、それを無視し、結局は自分らが非常に苦しむことになった。ナーセロッディーン・シャーやアブドル・アズィーズはバハオラの信教に公然と対抗し、バハオラに数多くの苦しみをもたらしたが、逆に彼らの方が、不名誉と恥辱<sup>ちじよく</sup>のうち<sup>に</sup>この世から去って行った。そして今日、ナポレオンやアレキサンダー二世やウィリアム1世などの強力な統治者の力は、跡形もない。人類は、自分らの指導者たちに盲目的に従い、この信教と、愛と平和と調和のメッセージを拒否してしまった。そのために、人類は多くの困難と苦しみに耐えなくてはならなかった。しかし最終的には、神の計画は実行され、「最大平和」が到来するであろう。そうして、全ての迫

害行為や戦争、流血や残酷な行為は終りを告げ、神の王国がこの地上に築かれるであろう。

## 28. 大いなる試練

「あらゆる状況のもとで辛抱し、神に完全なる信頼を置きなさい」

今度は、アドリアノーブルの人々がバハオラからの愛を受ける時がやって来た。信者の数は日毎に増し、彼らは大勢でバハオラを訪れにやって来た。アドリアノーブルの高官の一人であるカーシード・パシヤも、バハオラを何度か訪問し、その教えに多大な興味を示した。

オットーマン帝国の総理大臣は、アドリアノーブルを通りかかっている時、バハオラの大変な人気と威厳を目のあたりにし、何人もの巡礼者がバハオラを訪れているのを見た。それを不快に思った大臣は、このことを国王に詳しく報告した。ヤーヤとその信奉者らもこの機会を利用し、偽りの手紙を書いたり、バハオラの手紙の内容を変えたり、手紙に誤った解釈を加えたりした。そうして、バハオラが政府に対抗するため、信奉者の数を増やそうとしているのだと信じさせようとしたのである。

これを聞いたスルタン・アブドル・アズィーズは、怒りに腹を立て、バハオラをさらに遠くの地へ追放する命令を出した。ある日、兵士たちが、バハオラの家を包囲し、友人らの出入りを禁じた。命令は、バハオラが数日の間に、旅の準備をせねばならないというものであった。

彼らは今度は、バハオラをどこへ追放しようというのであろう。バハオラに同伴できるのは誰なのだろう。この旅はどこまで続くのだろうか。友人らは、バハオラの追放の知らせを聞くと、このようなことを考え、悩んでいた。しかし、誰にも知るすべはなかった。

バハオラの敵は、バハオラを国から国へと追放することで、この大業の光を消せると思っていた。しかし、神の聖なる火は、一刻一刻と広まっていき、勢いを増していった。いかなる状況下でもこの聖なる火を消すことはできないことを、彼らは知らなかったのである。バハオラが行く町ではどこでも、バハオラに対する人々の愛は非常に強まり、命を喜んで捧げるほどになった。バハオラがバグダッドからコンスタンチノーブル、そしてアドリアノーブル、ハイファ、アッカへと追放されることによって、さらに多くの人々が、神の顕示者を自らの目で見て、心の奥底から信じるのが可能になった。実際、これは実際に起きよう定められた、聖なる約束である。つまり、聖地は「祝福された美」なるバハオラの歩みにより、明るく照らされる運命にあったのである。

役人らは、バハオラとその友人数人だけが同伴できるという命令

を受けていた。それで、その他の友人らは同伴することができず、まことに耐えがたい思いをさせられた。そのような時、バハオラに同伴できずに置いていかれるという思いに耐えきれず、ある一人の信者が、剃刀かみそりで自分の喉をかき切ってしまった。最愛なる御方への献身さにより起きたこの行為は、そこに居合わせた者らに大きなショックを与えた。幸いなことに、そこに居合わせた人たちの助けにより、この信者は命を取りとめた。彼の命を救った人たちは、信者らを引き止めることはもはやできないでしょうと政府に伝えた。

## 29. 最も苛酷な牢獄

「おお人の子よ！わが災厄さいやくは、わが配慮である。外見は火であり、復讐である。しかし内面は光明と慈悲である…」(「隠されたる言葉」、アラビア編、#51)

ハイファに着くと、バハオラとその同伴者らはすぐに、小さな船に乗ってアッカへ向かった。今度は夏の旅となり、非常に暑かった。海上には風がなく、「大切な乗客たち」を強い陽射しからさえぎるものも、その船には装備されていなかった。8時間かけてアッカに到着した。到着するとすぐに、とても悲しい出来事が起きた。

アッカの人々は、新たにやって来た「囚人」と同伴者らを見ようと、

岸辺に群がった、同時に、バハオラたちは不信心な罪深い者らであるという警告を受けていた。彼らは、見たこともなければ知り話したこともないバハオラと一行に、憎悪と敵意感を示そうとやってきていた。もしこれらの人々が、アッカに到来した「人物」がどれほど素晴らしい聖なる「御方」であるか知っていたならば、そして、この「人物」がアッカを地獄から天国に変えていくかを知っていたならば、その態度は違っていただろう。



アッカは当時、気候が悪く、不潔で汚い町であった。町全体が牢獄であり、流刑植民地であった。それは、アッカの空を飛ぶ鳥は、窒息して落ちて来るといことわざがあるほど、荒廃した土地であった。この町は、地中海に面しており、その周りを高い塀が取り囲んでいた。入り口としては、二つの門があるのみで、一つの門は海に面しており、もう一方は陸に面していた。両方の門とも、常に見張りが立っており、夜は閉ざされ、誰も許可なしに入ることができないようにされていた。そして町の通りは暗く、狭く、曲がりくねっていた。

アブドル・アズィーズは、アッカをバハオラが入れられる最後の牢獄とし、その苛酷な環境によりバハオラは滅ばされるであろうと考えた。アッカから生きて帰って来るものは、ほとんどいなかったからで

ある。

番人たちは、バハオラを厳しく警戒するように命ぜられた。牢獄は要塞の構造をしており、周りには、悪臭のする水が流れていて、狭い橋が一つあるだけだった。アブドル・アズィーズは、バハオラと同伴者がアッカに着いたら、牢獄にバハオラを監禁するよう命じた。やがてバハオラは死んでしまうだろうと考えていたのである。バハオラの信奉者たちは、バハオラへの愛に陶酔し、引き離されるくらいなら命を犠牲にしたいと思うほどであった。

こうして、バハオラに同伴したいと思う者はできるという命令が伝わり、70人の信者が同伴することになった。さらに、ヤーヤの信奉者のうち4人は、バハオラと共にアッカに追放され、バハイのうち4人がヤーヤと共に、キプロスに追放されねなければならないという条件がつけられた。

バハオラたちが出発する日には、町全体が悲しみに満たされているかのようにだった。様々な宗教を背景とする人々が、バハオラの家集りに集まり、悲しみを表していた。彼らは、バハオラの外套のへりに接吻せつぶんをして愛と献身を示した。人間の手によって、バハオラを引き止めることはできないからであった。ついに、バハオラと同伴者らは、いく人かの役人に伴われて、アドリアノーブルを出て行った。彼らは、ガリポリとアレキサンドリアを経由して、アッカへと進んで行った。

ヤーヤと共にキプロスへ追放されることになっていた4人のバハイ

のうち一人、アブドル・ガファーという者であった。この悲惨な知らせを聞いた彼は、役人の所へ行って、自分もバハオラに同伴させてほしいと請うたが、聞いてもらえなかった。望みがないとわかると、彼は海に身を投じてしまった。彼にとって、ヤーヤに同伴するくらいなら死んだ方がましだったし、最愛なる御方から引き離されたくないからである。役人らは再び、バハオラへの犠牲として捧げられた命を救った。大変な苦労の後、彼らは彼の意識を取り戻し、ヤーヤに同伴するよう強いた。これこそ、バハオラが「隠されたる言葉」の中で語っておられる愛のことである。

「おお正義の子よ！愛するものが愛される者の国以外のどこへ行き得ようか。どの探求者が自分の心に欲する者から遠ざかって安息を見出だすや、まことの愛人には融和こそ生命であり、別離は死である。彼の胸には忍耐が欠けている。また心には平安がない。彼が愛するものの住家に急ぐためには、幾百千の生命も捨てるであろう。」  
（「隠されたる言葉」、ペルシャ編、#4）

このような出来事は、ナーセロッディーン・シャーやスルタン・アブドル・アズィーズの耳に届き、それほど多くの者が命を犠牲にしようとするバハオラとは一体何者なのかという恐れと驚きを感じさせた。手と足を縛しばられて力づくで連れていかれたアブドル・ガファーは、

そのような警告にもかかわらず、後に脱出し、アッカにたどり着いた。彼はそこで死ぬまで暮らした。

困難な旅を終えると、老若男女から成る囚人らは、残酷でかつ、せんさく好きな見物人らの前を通って、汚い牢獄の中に入って行った。最初の日の夜、彼らは食べ物や水をさえもらえなかった。庭にあった水みず桶の水は、塩辛く、また汚れていたのおけで、飲めなかった。翌日、彼らは腐りかけた黒パンをもらった。当然、誰もそれを食べられず、空腹と喉の渇き、そして悪臭と不潔な環境のため、みな病気にかかってしまった。病気にならなかったのは、アブドル・バハともう一人の信者だけであった。

やがて、信者のうち三人が命をなくした。そのうち二人は兄弟で、バハオラは、二人は手に手を取ってアブハ王国へ行ったと言われた。「祝福された美」は、このような環境でそれから2年と5ヶ月過ごされた。バハオラと一行は、ありとあらゆる不当な仕打ちを受けたのである。

このバハオラの追放の知らせがイランのバハイたちに届くと、彼らは、言葉に表せないほどの情熱を抱いて、最愛なる御方に会うために旅に出た。彼らは、バハオラに会うためには、いかなる困難や苦難にも耐える覚悟であった。しかし、最愛なる御方は囚人であり、オットーマン帝国の残酷な王は、誰もバハオラに会ってはならないという命令を出していた。

バハオラへの愛のために心が燃え上がっていた、これらの誠実な



信者たちは、アッカに到着すると何日かとりの外で立って、独房の鉄格子の向こう側におられるバハオラかいまの姿を垣間見ようとした。バハオラは、遠くに見える信者たちの姿を見られると、いつも、白いハンカチを振って、姿が見えたことをお知らせになるのだった。ただそれだけではあったが、バハオラの合図は、疲れ果てた巡礼者た

ちに大きな喜びと満足をもたらした。彼らは再び徒歩でイランに戻り、心配して待っている信者たちに、バハオラが無事でおられるという良い知らせを伝えるのであった。

偉大なるバハイの歴史家であるナビルは、バハオラに会いに来た巡礼者の一人であった。しかし、彼は町の中に入るのを許されなかった。それで、カルメル山の中腹にあるエリヤの洞窟に宿を求めた。彼は毎日、期待に胸をふくらませて、熱心に16キロ以上も歩いて、アッカの町の扉まで行った。そこから、彼は、バハオラと家族が入られている牢獄の窓を見ることができた。彼は「祝福された美」の手が鉄格子の後ろに見たい思いで、辛抱強く待っていたのだった。

### 30. 最愛なる御方のためのスイセンの花

「信念の真髄とは、言葉数が少なく、実践に富むことである…」

サエサンはアディルバイジャンの村である。この村の住人たちは、バハオラが使命を宣言された時からバハオラを受け入れており、彼らはバハオラの信教に対する忠実さと誠実さでよく知られていた。

バハオラが「最も苛酷な牢獄」におられた時、サエサンに住む、心の清い忠実な信者らが幾人か、最愛なる御方に会うために、アッカへ向けて旅立った。彼らは裸足<sup>はだし</sup>で山や谷や砂漠や平原を旅し、ようやくこの牢獄都市へやって来た。「祝福された美」は、彼らの素朴さと誠実さに強く胸を打たれ、喜ばれた。彼らは、大変な困難を通してこの町に着き、最愛なる御方が小さな汚い牢獄におられるのを見た。また、囚人らが不健全な食べ物を食べねばならないのを知って、彼らの心は悲しみでいっぱいになった。自然の緑や新鮮な空気を好まれる「祝福された美」が、どうしてあのように小さな薄汚い部屋にいることができよう。

ある日、バハオラのおそばにいる時、彼らはもう黙っていることができず、一人がこう言った――「私たちの村へいらして下さい。この気候は蒸し暑いです」。しかしバハオラは、それはできないと言われた。サエサンの人々は、バハオラが快適に過ごせるためには

何でもいたしますと言って、もう一度懇願<sup>こんがん</sup>した。彼らは、サエサンの気候はアッカよりずっと良いですと言ったが、バハオラは、自分は囚人であるから行くことはできないと言われた。これを聞くと、彼らの目は涙でいっぱいになり、こう言った――「囚人ですって！誰があなたを囚人にする事ができるとおっしゃるのですか。あなたは王の中の王でいらっしゃるのに」。バハイたちのこの深い愛と献身にもかかわらず、「祝福された美」は、牢獄を去ることをなさらなかった。それは神の意志であった。バハオラはそこにとどまり、予言が実現されるようになっていたからである。

サエサンの信者らが出発する日は、最愛なる御方から引き離されるということで、彼らにとって、とても悲しい日であった。自分らの村に戻るまで、バハオラの美しい声や、慰めと英知の言葉がずっと、彼らの耳に鳴り響いていた。

このバハイたちの中に二人の若者がいた。彼らは二人ともムハンマドという名であった。当時の人々は姓を使わなかったので、人々は二人をムハンマド1、ムハンマド2などと呼んで区別していた。最愛なる御方が自然の美から引き離されているのに、自分たちは緑に囲まれて自由で安楽な生活をしているという事実は、この二人にとって耐えがたかった。バハオ



ラの苦しい生活について思っていると、彼らには素晴らしい考えが浮かんだ——「最愛なる御方に花を持っていこうではないか。暴君がバハオラを監禁し、自然の美を奪ってしまったのなら、我々は、自然の美の徴として、花瓶に花を入れて、バハオラのいらっしゃる所へ持っていこうではないか」。しかし、どんな花を持って行ったらいいだろうか。一方のムハムドが、スイセンの花はどうかと提案した。それは、魅力的な春の象徴であるから。

数か月後、長い祈りと瞑想の後、彼らはこの計画を遂行することにした。彼らはそれぞれ、スイセンの球根を植えた鉢を手に持ち、アッカへ向けて歩いて行った。道のりは長く、またそれは危険な旅でもあった。というのは、追いはぎに襲われる可能性があったし、また、目的地が知れたら、国境の番人らにより旅を妨害されるかも知れなかったからである。しかし、この二人は、最愛なる御方に会い、この贈物で喜んでいただくという期待を胸に抱いていた。それで、あらゆる困難を乗り越える準備ができていた。旅の途中で泉を見つけると、喉の渇きを癒す前にまず、スイセンに水をやって、アッカに着くまでに花が咲くよう祈った。それは徐々に成長し、すぐに小さな芽を出し、やがて良い香りのする花を咲かせた。

ついにアッカが見える所までやって来た。彼らは、すぐに最愛なる御方に会えると思うと、身体の疲れが吹き飛んだ。そしていろいろな想いを巡らせた——最愛なる御方のお身体の調子はいかがだろう。花を気に入っていただけるだろうか。自分たちの愛と献身

による、このみずぼらしい贈物を受け入れて下さるだろうか。

このような想いをめぐらすことにより、彼らはさらに活力を得、アッカの町へ向かって歩調を速めていった。そして、ついにアッカに到着し、鉢をしっかりと手にして進んでいった。

待ち望んでいた時がやって来た。最愛なる御方の前に出てようやく気を取り戻し彼らは、花を捧げた。彼らは泣くのを抑えきれなかった——「私を犠牲にして下さい。私の魂を救って下さい!」。そう叫ぶこの二人の、献身的で離脱心のあるムハンマドを、バハオラは抱きしめられた。二人はまことに、愛と忠実の権化そのものであった。「祝福された美」は、長年牢獄の壁だけ見て過ごしてこられたが、今、美しいスイセンの花に目をやり、愛情いっぱい感謝の念を示され、贈物をお受け入れになった。

### 31. 殉死者の王子

「まことに我は言う——神の道において降りかかることは全て、魂にとって最愛のものであり、心が望むものである。神の道における致命的な毒は、純粋な蜂蜜であり、あらゆる苦難は、清き水を飲むことと同じである」

バハオラが投獄されてから二年目に、もう一つ忘れ得ぬ出来事が起きた。それはバハイ信者の強い信仰と勇気、確固不動の精神、

そしてバハオラの聖なる大業の深遠さを示すものであった。それはほんの17歳のバディという若者に関する出来事である。バハオラ



バディ

は、アドリアノーブルにおられた頃、ナーセロッドイーン・シャーに書簡を啓示なさった。その書簡で、バハオラは自らの無罪を証明なさった。また、この大業の真実性を示すために、学識あるウラマーたちを集めて集会を開くよう、シャーに頼まれた。しかし、バハオラは、まだこの書簡を送っておられなかった。というのは、この書簡をシャーの手に、自ら渡せる勇気のあるふさわしい人物がいなかったからである。

当時、バハオラに会うことは、大変困難であった。しかし、「祝福された美」への愛で満たされていたバディは、あらゆる障害を乗り越えて、自分の望みに達した。しかし、バハオラの愛と精神に触れる前、彼はバハオラの大業に関心を持っていなかったし、父親にもあまり従順ではなかった。父親は以前、優れたバビ教徒の一人であり、後にバハオラの献身的な信者となっていた。そのような父親のもとに育ったバディであったが、ナビルに会うまで、あまりバハイの大業に興味を示さなかった。ナビルに会い、精神的な事柄について話をしているうちに、彼の心は変わってしまった。そうして、バハオラに

会うために、巡礼に行くことになったのである。

バハオラに会ったバディは、新しい人間に創りかえられてしまった。バハオラ自身、ある書簡で述べておられるように、バディに一言発することによって、全く新しい創造物に変えてしまわれたのである。それは、バディの存在全体を震えさせるほどの言葉であった。全能者の手を通して、バディは新しく創造された。彼は、もし神が命令なさるならば、単独で全世界を征服し得るほどの力を授けられたのである。

バハオラと会った時、バディは、この大いなる使命を授かった。それは、バハオラの書簡を国王の所へ持っていくという使命であった。これは、多大な困難や危険、いや命を失うことをも意味する重大な任務であった。しかし、バディにとって、最愛なる御方と、大業の発展のために、命を捧げることほど素晴らしいものはなかった。

バディが海の近くに立っている所へ、バハオラからの使いがやって来た。その使いは一つの箱と封のされた封筒を持って来た。バディは、国王への書簡が収められている箱を手にとると、<sup>うやうや</sup>恭しく、それに接吻した。自分あてに書かれたもう一つの書簡を読むと、バディの顔は喜びと感謝でとても輝いた。それはあたかも、全世界が彼に授けられたかのような喜びであった。なぜならバディは、書簡で、自分がすぐに殉死者の冠をかぶるよう定められていることを予告されていたからであった。バディは、愛によって全てを忘れてしまったかのようにであった。書簡を持って来た使いは、旅に必要な物や



経費用のお金を取りに行ったが、バディは、心が愛によって満たされ、我慢できなくなり、使いが戻る前にテヘランへ向けて出発してしまった。バハイの歴史によると、バディは、テヘランへ向かう途中、しばしば立ち止まってアッカの方に向かい、ひざまづき、神にこう嘆願した——「おお神よ、あなたが、その慈悲によって私に授け給いましたものが何であれ、聖なる正義によってそれを奪いたまわず、また、この恩恵を保つための力を私に授け給え」。何という魂の清さ、信念の堅さであろう！試練や苦難を、「祝福された美」から受けた祝福として見なすほど確信を得たバディは、何と幸せな若者だったことか。



こうしてバディは、旅に必要な物もなく、信念と誠実さだけを持って、4か月間旅をした。そして愛と情熱で満ちた状態で、テヘランに到着した。

シャーは金曜の夕に町を出て、町の門で物乞いたちに布施をするのが習慣であった。シャーは、ペルシャの休日である金曜の夜に物乞いたちが何か食べられる

よう、戦車からコインを投げ与えた。ある日、シャーはいつものように物乞い達にコインを投げ与えていた。通りには、多くの人が群がっ

ていた。物乞いらが国王からコインをもらおうと寄り集まっている時、シャーは、ある一人の若者に気づいた。若者は、みすぼらしい服を着ていたが、この恒例の出来事に少しも注意を示していなかった。彼は超然として、また威厳を持ってそこに立っており、鋭い目でシャーを見ていた。へつらいや偽りの敬意に慣れていたナーセロッディーン・シャーは、若者の態度が気に入らず、強いショックを受けた。

それから数日後、シャーはシェミランへ狩猟に出かけた。双眼鏡を通してあたりを見ていると、何と、あの同じ若者が、王宮の方に向かって岩の上に座っているのではないか。シャーは、今度はじっとしていられず、若者を連れて来るよう、兵士らに言った。兵士らはただちに出ていき、若きバディを連れて戻って来た。

シャーは傲慢そうに王座に座っていた。周りには大臣らが立っていた。大臣たちは、バディがシャーの前に呼び出された時、恐れのために身動きできないでいた。若者は、勇気と信念の権化のように見えた。彼はしっかりと足取りで国王の方へ進み、国王を真っ向から見てこう言った——「おおシャーよ、私はあなたに、私の主からのメッセージを持って参りました」。そうして彼は冷静に、また自信を持ってシャーに書簡を手渡した。

ナーセロッディーン・シャーは、並外れて大胆不敵な態度に驚き、バディをただちに牢獄へ入れるよう命じた。ナーセロッディーン・シャーは、残酷で憎悪に溢れていたが、ウラマーたちを集めて書簡

を読み、返事をするよう命じた。しかし、ウラマーたちは、バハオラ



拷問を受けるバディ

に真っ向から対抗できないで、あるいは返事ができないで恥をかくことを恐れ、集会を開くことを望まなかった。その代わり、彼らは、バハオラが詐欺師であり、この書簡を持って来た使いは殺されるべきであると言った。

それでナーセロツディーン・シャーは、あらゆる手段を用いてバディを拷問するよう、衛兵たちに命令した。バディがすぐに連れてこられた。熱く熱した鉄の棒が、身体に焼きつけられ、焼かれた肉体の悪臭が至る所に広がった。バディは冷静かつ落ち着いており、苦しみのために泣いたり叫んだりしなかった。このようにして、彼らは3日間、バディを拷問し続けた。彼らは、真っ赤に焼かれたレンガをバディの胸にあてたりしたが、バディはそれでもなお、一言も発さずに耐え忍んだ。処刑執行人らはどうしてよいかわからなかった。

結局バディは、17歳という若さで殉死した。彼は、自分の望みに達し、殉死の冠<sup>かんむり</sup>を勝ち得た。

バハオラによって変えられた人々は、このような性質を示したのである。彼らは、大変な試練に対して犠牲と勇気を示し、歴史を変えた。忍耐と堅固さの意味することは、これらの愛に酔ってしまった殉死者らの行動によって示されている。

バディは、単に17歳の若者というだけではなく、最愛なる御方を思い起こすことにおいてのみ、その心臓を鼓動させる、愛する人でもあったのである。彼の目は、バハオラの真珠のような二つの目だけを見た。バハオラの愛は、バディの静脈を貫き、バディが拷問を受けた時も、全ての苦痛を感じなかった。バディの若々しい身体は、情け容赦ない執行人らによって捕らわれてしまったが、彼の清く勝ち誇った魂は、決して束縛されることなく、純潔の領域へと飛んで行ったのである。

結局、この書簡への返事はなされなかった。一方、バディは、バハオラにより「殉死者の王子」という称号を与えられ、まことに比類なき存在として記憶されることになった。歴史上かつて、バディのような人物は存在しなかった。それから3年後、バハオラは、バディの犠牲について語られ、誉めたたえられた。バハオラは、ある書簡で、バディに力と強大の精神を吹き込み、新しく深遠な創造物を創り出したと記されている。

## 32. 最も清き枝の殉死

「おお人の子よ！ 熟考し反省せよ。汝の願望は汝の寢床に死することなりや。あるいはわが道に殉教し、汝の生き血を塵の上に流すことにより、至高なる樂園にてわが命

令の顕示者となり、わが光の啓示者となることなりや。正しく判断せよ。おお僕よ！」(「隠されたる言葉」、アラビア編、# 46)

ミルザ・ミフディは、アブドル・バハとバヒヤ・カヌームの弟であったが、聖なる家族と共にバグダッドへ行くことはできなかった。というのは、当時、彼はほんの2歳に過ぎず、あの極端に厳しい寒さの中で追放生活を共にすることは困難だと思われたからである。10歳に



なって初めて、彼は家族の所へ行けるようになった。愛情に満ちた父親と母親、バハオラとアシイ・カヌームの喜びと幸せがいかなるものだったか 想像できよう。バハオラは、ミルザ・ミフディに「最も清き枝」という称号をお与えになった。彼は、それから家族と共に暮らし、栄光に満ちた父親と追放生活を共にし、バハオラと共にあらゆる困難に耐えた。そして日毎

にバハオラの信教に対する信念と理解と興味を増していった。

「最も清き枝」は、バハオラが書簡を記されるのを手伝い、「父親」に仕え、残りの時間は祈りと瞑想に費やした。ある晩、彼はバハオラの所から去り、いつものとおり、牢獄の屋根の上に出て、バハオラが書かれた詩を唱え始めた。目を閉じて集中していると彼の頬ほおに

は涙が流れ、声が震えてきた。しかし突然、彼は足を滑らし、明かり窓を抜けて下に落ちてしまった。

この転落の音を聞いて、皆がかけつけると、彼は木柵すべの上に落ち、血でおおわれ、重傷を負っていた。

バハオラは、自分の愛する息子のそばにやってくる、お座りになった。あの晩、いかなる祝福がミルザ・ミフディに授けられたかは、神のみがご存じである。彼の様態は非常に危うかったが、全てのバハイたちがやって来るまで生き延びるよう、バハオラが望まれた。あらゆる者がやってきてミルザ・ミフディの姿を見た後、バハオラは彼が何を望んでいるのかお尋ねになった。傷が癒され、この世に生き続けたいかというバハオラの声聞いたミルザ・ミフディの顔は、歓喜のために花が開くように明るくなり、こう言った――「私には神のご意志以外の望みはありません。私は『祝福された美』にお頼みしたことがあります。そしてそれが恩恵と慈悲により受け入れられるよう願います。私の望みは、牢獄の扉が開けられ、『祝福された美』の忠実な愛人たちが、長く困難な旅の後に、彼に会えずにいることのないよう、私の命が犠牲として受け入れられることです」。「祝福された美」は愛する息子の最後の、神聖な望みをかなえられた。栄光ある父親の膝の上で22時間も血を流した後、「最も清き枝」はアブハ王国へ昇天して行った。こうして22年の短い、聖なる人生の終りをとげたのである。

バハオラは、ご自身の大事なご子息が、「最も苛酷な牢獄」の扉

が開けられ、人類の一体性が確立されるよう、いかに自らの命を犠牲にしたかを、書簡の中で語られている。

この頃の出来事について、ナビルは次のように記している。その頃、彼はアッカの近くにある町の郊外で、何人かの巡礼者らと滞在していたが、突然、軽い地震を感じた。それは3分ほど続いたのだが、人々はみな、大変動揺していた。後に、このことがバハオラのおられる前で語られると、バハオラはこう言われた――「我が神からの信託人である『最も清き枝』を、神のもとへ返したゆえに、振動が感じられたのである。」

### 33. アブードの家

「おお汝ら、国々の中の賢き者らよ！異なるということから目をそらし、一体性の方へ目をすえよ」

「最も清き枝」が殉死してから4か月もたたないうちに、牢獄の扉が開けられ、バハイたちは再び、バハオラに会うことができるようになった。今や彼らの頭と心は、王の中の王を訪れることによって明るく照らされるようになったのである。こうして、「最も清き枝」の清き精神が望んだことが実現したのである。

牢獄の扉は開かれた。というのは、ミルザ・ミフディが亡くなったと

いう悲しい出来事を知ったアッカの数名の住人が、聖なる家族を、あの牢獄から出してくれるよう政府に頼んだからである。そして、政府はいずれ、兵士たちの住める場所が必要だったので、牢獄<sup>から</sup>を空にして、軍隊に使わせることにした。こうして、バハオラと同伴者たちは、2年2か月と5日の後に、「最も苛酷な牢獄」を出て、アブードの家に住むようになったのである。



アブードの家

バヒア・カヌームは、当時のことを思い起こして、後に次のように語っている――「私たちは、あの汚い場所を遂に出ることができ、みな幸運であった。あの二年間、私たちはたったの三

回、それもほんの一時間だけ外に出るのを許されたのだから。」

「最も苛酷な牢獄」での二年間、バハオラは外の世界と全く接触することがなかった。バハオラが啓示なされた書簡のうちいくつかだけが、窓を通して、あるいは訪問を許可された巡礼者らを通して、外に出されるのであった。これらの書簡はイランで、バハオラからの便りをしきりに待っている友人たちに届けられた。

バハオラの手紙や書簡を持って行った者の一人に、シェイク・サルマンという者がいた。それを運ぶことは、非常に困難な任務であった。シェイク・サルマンは旅の間、ほとんど歩き、書簡が敵の手に<sup>おちい</sup>陥らぬよう、最大の注意を払った。ある時、ペルシャの友人から送

られた重要な嘆願の手紙を持っていたが、彼は不運にも、国境の番人たちにつかまってしまった。この大切な手紙が役人の手に入らぬように、シェイク・サルマンは無理やりそれを飲み込んだ。これで、バハオラと忠実な信者らの通信がいかに困難であるか、また、信者らがいかに勇敢で、忠実で、また利己心がなかったか、わかるであろう。

### 34. 悲惨な日々を終末

「恐れるなかれ。これらの扉は開けられ、わがテントはカルメル山上に張られ、最高の喜びが現わされるであろう」

徐々にアッカの人々は、バハオラが無罪であることを理解し始めた。また、バハオラの優しく、愛情に満ちた態度は、敵の心を変えた。その頃、アッカの知事は、賢く、理解力ある人物に代わった。この新しい知事は、バハオラに会い、その書物を読んでからは、バハオラに引きつけられ、バハオラの前では恭うやうやしく靴を脱ぐほどであった。また、知事は、自分の息子をアブドル・バハの指導で学問を学ばせたりもした。

ある日、「祝福された美」の前にいる時、彼はこう言った——「わが主よ。あなたのために私にできる任務を何か授けていただけまし

たら、どんなに光栄でしょうか」。バハオラは、アッカには、30年間放置されている高架式水道がある、とおっしゃった。バハオラは、全ての人が水を利用できるよう、修復について検討することを知事に提案なされた。バハオラは、決して、ご自身の利益のために頼み事をされることはない。彼のお望みは全て、人々の安らぎと安楽のためのものである。アッカの住人が新鮮な水の恩恵を預かれるよう、知事は、ただちに高架式水道の修復を命じた。

この新しい知事は、バハオラへの献身のために、「あなたはいつでもお好きな時に自由にアッカを出ていくことができます」とバハオラに言った。しかしバハオラは、ご自分がまだ、オットーマン帝国の囚人であるから、申し出を受け入れることはなさらなかった。アッカの人々の心には、バハオラに対する愛と尊敬がさらに強くなり、アッカの塩辛い水と汚れた空気がきれいになったのは、バハオラによる祝福のお陰であると言われるほどであった。これらの人々は、バハオラと同伴者たちがアッカへ来た時、無愛想な態度を取っていた。また、自分の子供たちが、バハイの子供らと遊ぶことも許さなかった。しかし今や、彼らの心は全く変わってしまったのである。

### 35. 最も神聖なる書

「この書は、わが命令と禁止令の星によって飾られた天で

ある... わが命にかけて誓う！それは、人々の知性を驚嘆させるようなやり方で下されたのである」

「ケタベ・アグダス」(最も神聖なる書)が、バハオラによって啓示されたのは、1873年、アブードの家においてであった。それはバハオラの律法時代において、最も重要かつ神聖な書である。過去の聖典はみな、信奉者らが記憶に基づいて書き記したものであるが、この「書」は異なり、最初から最後までバハオラによって啓示され、秘書が書き記したものを、バハオラが後に訂正なされたものである。つまり、あらゆる言葉がバハオラ自身から下されたものなのである。「ケタベ・アグダス」には、法律や法令、証拠や勧告の言葉などが収められている。例えば、必須の祈りや断食の法、科学や技術などに従事すること、仕事、子供の教育、布教、清潔などといった事柄である。また、この書で、バハオラは、ワインを飲むことや賭博、窃盗や殺人や政治への干渉、嘘をつくことや陰口をすることや喧嘩などを禁示なしている。

次は、ケタベ・アグダスから抜粋した言葉である。

「汝らの頭を信頼性と忠実の花輪で飾り、心を神への畏れの衣で装い、舌を完全なる真実性で飾り、そして身体に礼儀正しさの服を着せよ」

「神の言葉を毎朝毎夕唱えよ。これを怠<sup>おこた</sup>る者は神の聖約と契約に忠実ではなく、今日<sup>こんにち</sup>それから顔<sup>おもて</sup>を背ける者は、神から顔を背ける者の一人である」

「世界の人々は深い眠りに陥っている。もし眠りから目を覚ましたならば、人々は全知にして全てに賢き御方なる神の方へ、熱心に急いでいくであろう。主が、たった一言<sup>ひとこと</sup>でも話しかけて下さるだけでもよいから、自分たちの事を憶えていて下さるよう、人々は、自分の所有するものを全て投げ捨てるであろう、たとえそれが地上の全ての宝であったとしても」

「友好と調和の精神にて、全ての宗教の信奉者らと交われ。そうすれば、彼らは、汝らから神の甘い香りを吸い込むであろう。人々の間で、愚かなる無知の炎によって圧倒されないよう注意せよ」

「自らの子供、または他人の子供を教育するなら、それは、あたかも、わが子を教育するのと同じことである」

「人類において清潔の神髄であれ」

### 36. マズラエの館

「田舎は魂の世界であり、都会は肉体の世界である」

牢獄の扉がどのようにして開かれるに至ったかは、アブドル・バハの話によって最もよく説明されている。次は、その話の内容である。

「バハオラは、田舎の美と緑を愛しておられた。ある日、彼はこう言われた——『我は9年間、緑を目にしていない。田舎は魂の世界であり、都会は肉体の世界である』。ある人から、バハオラがこの言葉を述べておられたと聞いた時、私は、バハオラが田舎を恋しがっておられることを知った。私は、バハオラの望みをかなえるためならば 何でも成功すると確信していた。



た。彼はアッカ から北へ6キロの所に、マズラエ という

「その頃、アッカにはムハンマド・パシヤ・サフワトという人物がいたが、彼は、私たちに大変、敵対心を持っていた。

<sup>だいていた</sup>大邸宅を持っていた。それは庭園に囲まれ、小川が流れる美しい土地であった。私は、このパシヤの家を訪れ、こう言った——『パシヤよ、あなたは邸宅を留守にしてアッカに住んでおられる』。彼はこう答えた——『私は病弱で、町から出ることはできない。もし邸宅へ戻ったら、独りぼちになり、友人たちに会うこともできない』。そこで私は、こう答えた——『あなたがそこを留守にしている間、私たちに貸して下さらないか』。彼はその申し出に驚いたが、すぐに承諾した。私は、非常に安い値段でその家を借りる事ができた。一年間に5ポンド、5年分の家賃を払い、契約した。私はその家を修理するために人を遣り、庭園を整備させ、浴場を作らせた。それから、「祝福された美」がお使いになれるよう、馬車も用意させた。ある日、私は、自分で土地を見に行くことにした。町の境界線の壁を通過してはならないという繰り返し発せられた命令にもかかわらず、私は町の門から出て行ったが、見張りについていた憲兵<sup>けんべい</sup>は、何も言わなかった。それで、私はそのまま邸宅の方へと向かって行った。次の日も、私は数人の友人や役人と一緒に出かけた。町の門の両側には、番人<sup>ばんにん</sup>と衛兵<sup>えいへい</sup>が立っていたが、私たちに止めたり、妨げたりすることはなかった。さらに別の日には、宴会を開き、バージの松の木の下に卓<sup>た</sup>を広げ、町の著名な人々や役人らを招待した。

そして夜には、私たちはみな、一緒に町へ戻った。

「ある日、私は、『祝福された美』の聖なる御前に出て、こう言った――『マズラエの館は、あなたのために準備ができています。またそこへ行けるように、馬車も準備しております』(その時アッカには馬車はなかった)。しかし、『祝福された美』は、『われは囚人である』と言われて、行くのを拒否なさった。しばらくした後で、もう一度頼んでみたが、返事は同じであった。さらにもう一度、お願いに行ったが、返事は同じであった。それで、それ以上は主張しないことにした。さて、アッカには、ムハンマド・シェイクという人物がおり、とても有力で著名な人物であった。彼は、バハオラを愛し、彼もまたバハオラにとっても気に入られていた。私は、このシェイクを呼び、状況を説明した。『あなたは大胆だ。今晚、バハオラの聖なる御前を訪れ、ひざまずいて、バハオラの手を取りなさい。そして、アッカを出て行くと約束なさるまで、両手を離してはならない』。彼はアラブ人だったから... 彼はまっすぐにバハオラの方へ進み、バハオラの手を近くに座った。彼はバハオラの手を取り、キスをし、『なぜアッカをお出にならないのですか』と尋ねた。するとバハオラは、『私は囚人である』と言われた。シェイクは答えた――『そんなことはありません！誰があなた様を監禁する力を持っているのでしょうか。あなたは、ご

自身を牢獄に閉じ込めになり、自らの意思でそうされているのですよ。私は、あなたが牢獄から出て宮殿に行かれるよう、懇願致します。そこは美しく、緑に囲まれています。樹々は美しく、オレンジは火の球のような実をならしていますよ』。『祝福された美』が、『私は囚人であるから、出ていくことはできない』と言われるたびに、シェイクはバハオラの手を取ってキスをした。彼はまる一時間、このように嘆願し続けた。そしてようやくバハオラは『ハイレ・フーブ』(よろしい)とおっしゃった。シェイクの忍耐と粘り強さが報われたのである。彼は大変喜び、聖なる御方の同意の知らせを私に伝えに来た。『祝福された完全』と会ったり話したりするのを禁じるアブドル・アズィーズの厳しい勅令ちよくれいにもかかわらず、私はその翌日、馬車を走らせ、バハオラと共に宮殿へ行った。誰も反対する者はおらず、私はバハオラをそこに残し、町へ戻った。

### 37. レズワンの園

「おお友よ！ 汝の心の花園に愛のバラのみ植えよ。愛情と願望のウグイスから汝の手を放すな...」(「隠されたる言葉」、ペルシャ編、#3)



アブドル・バハは、アッカの郊外に土地を一画<sup>いっかく</sup>買い取り、そこを美しい庭園に仕立てあげた。そこは、「レズワン（『楽園』という意味）の園」という名で知られるようになった。その庭園は、バラやマンネンロウ、ハッカやタチジャコウソウ、香油の香りなどでいっぱいだった。緋色<sup>ひいろ</sup>や白のゼラニウムは、庭園をより美しくし、燃えるような大きな花を咲かせたザクロの木も、庭園をさらに美しくし、新鮮さを加えた。これらの若木は、巡礼者らが持って来たもので、それぞれ、その巡礼者らの愛と献身の象徴であった。巡礼者らは、アッカに歩いて来るまでの様々な困難や危険にもかかわらず、これらの草木を最愛なる御方の庭園のために、大切な贈物として持って来たのである。

「祝福された美」のお好きな花は、幼い頃から白いバラであった。今、多くのバラが庭園のあちこちで生長しており、葉を輝かせ、快い香りを放っていた。これらの草木はとても清らかで、平穏な雰囲気をかもし出しており、巡礼者らは、それらから、愛と献身を感じれるほどであった。後に、遠くヨーロッパやカリフォルニアの友人たちも花を持って来たので、レズワンの園は、東洋と西洋の調和の象徴となった。人類は、社会のあらゆる背景の人々から成り立っている。この庭園は、社会の生ける模範、美しい模範である。アブドル・バハや巡礼者らが、熱心かつ大事に育ててきたレズワンの園にバハオラが行かれたことは、まことに忘れる事のできない、すばらしい出来事であった。

アブドル・バハは、その日、とても幸せであった。なぜなら、最愛なる「父親」が、40年間の厳しい、困難に満ちた牢獄生活を送り、とても好んでいた自然の美を9年間も奪われた末に、ようやく、小川の流れるクワの木の下でくつろいでおられる姿を見ることができたからである。わき出る泉や流れる小川の音は、何と快い響きであったことだろうか。

聖なる家族の子供たちは、バハオラと共にこの庭園でピクニックをするのを、一番楽しみにしていた。

アブドル・バハは、アブードの家に住んでいた時、ムリレ・カヌームという若く美しい女性と結婚した。彼らには4人の娘が生まれた。子供らは、朝食の時間を一番楽しみにしていた。というのは、アブドル・バハと一緒にいれるのはその時だけで、また、神の顕示者たちに関する様々な話をしてくださったからである。

バハオラは、家族のため、特に孫たちのために織物を買う目的で、毎年、ペイルートに人を遣わされた。織物が届くと、バハオラは子供たちを招いて、一番好きなものを選ばせた。

また、バハオラは、時間を厳守なさり、物事がきちんと整頓されているのを好まれた。個人的な事柄においても、バハオラは非常に几帳面<sup>きちょうめん</sup>で、全ての物が正しい場所に置いてあるよう気を使われた。彼は、特に清潔であることを好まれ、よくこう言われた――「外面的に清潔であることは、物質的なことではあるが、精神的にも大きな影響を及ぼす... 清潔で汚れのない身体であることは、人々の精

神にも影響を及ぼすのである」。

「祝福された美」は、とても愛情に満ちた物腰で、しばしば、子供たちに、「自分の持っている服で最もきれいな服を着てはどうか」と言われた。

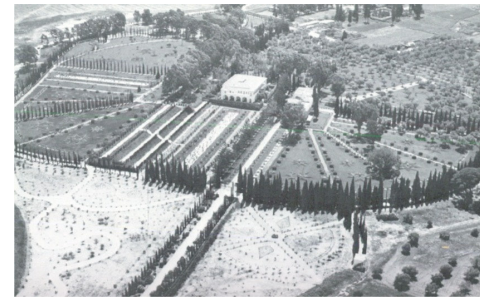
子供らは、友人たちが、バハオラに砂糖菓子の贈物を持って来る時、大喜びした。というのは、バハオラは必ず、それを子供たちに取っておいて下さるからである。時々、バハオラは冗談でこう言われた――お菓子箱かしぼこを安全な場所に置いておかないと、「師」(アブドル・バハ)が人にあげてしまうかもしれない。

子供たちが床の準備をする時、バハオラはしばしば、デザートを食べようお招きになった。寝る前になると、バハオラは、次の日、レズワンレズワンの園へピクニックに行く予定を子供たちに告げられるのだった。すると子供たちは、夜の間、興奮のためにあまり眠れなかった。あの美しい庭園へ、最愛の「祖父」に付き添ってピクニックに行くことは、子供たちにとって、表現できない喜びだったからである。

### 38. バージの館

「まことに、まことに、最もみじめな牢獄は、エデンの園に変えられた。まことに、そのようなことは、世界が創造されて以来、かつてなかったことである」

「祝福された美」は、マズラエの美しい館で二年間お過ごしになった後、バージに移られた。この館は、バハオラが監禁されている間に、大変な困難を通し、多額の費用を費やして、ようやく建てられた。しかし、数年後に伝染病が起り、持ち主は家を空けてしまった。アブドル・バハは、それを安い家賃で借りた後、しばらくして、バハオ



ラの住まいとして買い取った。バハオラの真の主権と偉大さが明らかになったのは、バハオラがこの館に住んでおられる時であっ

た。

オットーマン帝国政府は、バハオラが、死ぬまで「最も苛酷なる牢獄」に監禁されるよう命じていた。しかし、神の御心みこころは、そうではなかった。今ではあらゆる人が、身分の高低にかかわらず、バハオラに対して大いなる愛と敬意を抱いていた。また、知事は、ある一人の外国の役人と共に、バハオラを訪問してもよいかどうか尋ねたほどである。バハオラは、それを承諾なされた。この二人は、バハオラに会うと、その威厳に満ちた存在感にとっても強い印象を受け、扉のそばで膝まずいてしまった。彼らの態度は、それほど謙遜なものだったので、そこにいた者らはみな驚いた。ナーセロディーン・シャ

一とアブドル・アズィーズという二人の強力な国王は、バハオラの死を求めていたが、知事と外国の役人の二人は、バハオラの地位を理解しているかのようだった。

バハオラは、この館で、大いなる光輝と威厳のうちに、王の中の王のごとく、お暮らしになった。バハオラはよくこう言われた——「まことに、まことに、最もみじめな牢獄は、エデンの園に変えられた。まことに、そのようなことは、世界が創造されて以来かつてなかったことである」。

### 39. エドワード・ブラウン博士の訪問

「和合の幕屋は建てられた。お互いを見知らぬ者と見なすなかれ。汝らは一つの樹の実であり、一つの枝の葉である。」

バージで起きた重要な出来事の一つに、エドワード・ブラウン博士によるバハオラの訪問がある。彼は著名な東洋学者で、ケンブリッジ大学の教授であった。ブラウン教授の訪問は、1890年のことであった。彼はバージで5日間、客としてもてなされ、その間四回、バハオラと会見するという恩恵に預かっている。その時の印象について、彼はこう記録している。



エドワード・ブラウン博士

「私の案内人は、私が靴を脱ぐ間、ちょっと立ち止まった。そうして手を素早く動かしてカーテンを引き、私が通ると、それを元どおりにした。すると私は広い部屋に入っていた。その部屋の上手の一方には低いながいす長椅子があり、扉と反対側には二、三脚の椅子が置いてあった。私はどこへ連れていかれるのか、誰に会えるのかと思っていたが...しばらくすると、はっとして、この部屋に誰かいることにはっきりと気づいた。長椅子の端が壁に接している隅の所に、

すばらしい、そして神々しい人物が、イスラム教のダーヴイッシュがタージュと呼んでいる(しかし普通の帽子と違った高さや形をした)種類のフェルト帽をかぶって腰かけていた。そのまわりには白い小さなターバンがまといわれていた。私には、凝視したその人の顔を描写することはできないが、決して忘れることのできない顔であった。鋭い眼は人の心を読むようであった。力と威厳が、広い額にそなわっていた。私はその人の前に身をかがめた時、誰の面前にいるのか、聞く必要はなかった。その人こそ、王たちが羨み、皇帝たちが溜息をつくほどの献身と愛の的であったのである。

「その人物は、優しい、威厳のある声で私に座るように命じ、次のように 言われた——『あなたは、囚人であり流刑者である者に会いに来られた... 我々は、世界の利益と諸国民の幸福のみを望んでいる。しかし、彼らは、我々を暴動の扇動者とみなし、監禁と追放に値するものと考えた。全ての国々が一つの信仰のもとに一つとなり、あらゆる人々が同胞となり、人々の愛情と和合の絆が強められ、宗教間の相違が除かれ、人類間の不和がなくなること、これらのことに 何の害があるか。これらの無益な争いや破壊的な戦争はなくなり、やがて『最大平和』が訪れるであろう... 誇りは自国を愛する者にあるのではなく、全人類を愛する者にある...』」

「以上が、その時バハ(バハオラ)から聞いた言葉である。これを読む者に、このような 信条が、死刑と監禁に値するものであるかどうか、またこれらの 言葉が広まることによって世界は利益を得るか、または損失を招くかどうか、熟考していただきたい」。

#### 40. 3つのエピソード

「まことに我は言うー神への畏れは常に世界の人々に

とって確実な<sup>ぼうぎもぶつ</sup>防御物であり、安全かつ強力な頼みの綱であつた」

#### エピソード(1)

バハオラに関する短い興味深い次のエピソードは、バハオラがいかに優しく親切であられたかを示している。

バハオラは神の顕示者であり、地上のいかなる父親よりも優しいお方であつた。彼は常に、子供たちが最も好きなものをご存知であつた。

信者の一人であるムハンマドは、当時4歳か5歳であつたが、次のような話を残している。

当時の慣習に習い、人々は毎週金曜日に、バハオラに会うため、聖なる家族に伴ってバージを訪れていた。暑い夏のある金曜日のこと、他のみなは休んでいたが、幼いムハンマドだけは眠ることができず、部屋を出て二階へ上がって行った。部屋を通っていると、食べ物が置いてある所へやって来た。彼は喜んでそこに入り、まっすぐに砂糖容器の方へ向かって行った。ムハンマドは、両手に砂糖を取って口に詰め込んだ。周りを見渡して誰もいないのを確かめると、もう一度両手を容器の中に入れて砂糖を取り出した。そうして部屋から走って出ていこうとすると、突然、バハオラが目の前に現れた。かわいそうなムハンマドは、どうしてよいかわからなかつた。バハオラが入り口の前に立っておられるので、彼はとても<sup>おび</sup>怯えてし

まった。

「祝福された美」は、ゆっくりとムハンマドの方へ来られると、父親のような優しい物腰でムハンマドを部屋の真ん中にあるテーブルの方へ連れて行かれた。そして、テーブルの上にあるお皿から砂糖菓子を取られて、ムハンマドにあげようとなさった。ムハンマドは喜んでそれを食べた。そうしてバハオラは、「お前は甘いお菓子が好きなようだ。おいしく召し上がれ」と言われた。その時、ムハンマドは心の中でどんなにすばらしい思いをしたであろう。バハオラに対する愛は、彼の心の中でさらに増したに違いない。

ムハンマドは、その日から亡くなるまで、砂糖を使う時や砂糖菓子を食べる時はいつも、あの日の忘れえぬ出来事と、バハオラの愛情と隣れ<sup>あわ</sup>みを思い起こしたに違いない。

## エピソード(2)

信者たちは、バハオラの面前にいる時は別世界にいるようで、最愛なる御方のこと以外は全て忘れてしまうのだった。

例えば、タヒリ・マルミリは次のように語っている。

「ある日、私はバハオラの面前にいた。バハオラは私に座るように言われた。『タヒルにお茶を持ってきなさい』と秘書に言われると、秘書がお茶が持ってきて、それをくれた。私は、お茶をもらおうと突然、バハオラのお顔に目がいき、

驚きのあまり、我を忘れてしまった。それから私は、バハオラがこうおっしゃるのが聞こえた——『タヒルよ、あなたはお茶を全部、外套にこぼしてしまったではないか。この外套は、あなたがイランに着くまで着ておかねばならないのだから、大切にきなさい』。

「私は我に戻り、お茶を全部、外套の上にこぼしてしまっているのに気づいた。コップは落ちてしまい、受け皿だけが手に残っていたのだった。驚いたことに、イランまで私が持って行ったのは、その外套だけだった。というのは後日、追いはぎが、外套以外全部、私の所有物を盗んでしまったからである」。

## エピソード(3)

バハオラがご生存中、ヤズードの信者の一人である、とても素朴な老人が、「祝福された美」に会うために聖地へ向けて巡礼に出かけた。彼がバハオラの家に着いた時、他の信者たちもそこに居合わせていた。彼は部屋に入ると、「アラホ・アブハ」と言っ<sup>て</sup>こう尋ねた——「バハオラ様は、あなた方のうちどなたでしようか」。信者たちの間に座って目立たずにいたバハオラは、両手を広げて老人を抱きしめ、彼に愛情と慈<sup>いつく</sup>しみを雨のように浴びせた。

巡礼が終わると、老人は自分の町へ帰って行った。

時が過ぎ、ある日、秘書が届いた手紙をバハオラの所へ持って

来た。「まずは、我らがヤズードの友人からの手紙を開けなさい」とバハオラがおっしゃった。秘書はそれを探して開けて、こう言った――「しかし、ご主人様、それには何も書かれていない白紙しか入っておりません」。

「祝福された美」は微笑<sup>ほほえ</sup>んで、心の言葉には文字は必要ないのだ、とおっしゃった。そして、この何も書かれていない手紙への返事として、バハオラは書簡を啓示<sup>ほほえ</sup>なさり、その友人に祝福と恩恵を雨のように浴びせ、彼に宛ててイランに書簡をお送りになったのである。

#### 41. ハイファ

「正義は報酬と処罰という二つの柱からなっており、世界を教育するのは正義である。これら二つの柱は、世界中の人々の生命を維持する二つの泉である」

バハオラの人生の晩年、ハイファはバハオラの訪問により4回、祝福を受けている。最後の訪問時、バハオラは、この町に3か月滞在なさり、カルメル山にテントをお張りになった。その時、バハオラはバブの廟<sup>びよ</sup>がどこに建てられるべきか、アブドル・バハにお示しになった。信者たちは、バハオラがそこに滞在なさったことを記念して、11本の糸杉を植えた。現在ハイファでは、この聖なる廟<sup>おうごん</sup>の黄金のド

ームを見ることができる。廟は、頭<sup>あたま</sup>に黄金の冠<sup>かんむり</sup>をつけ、白いドレスを着た花嫁のようである。それは、それらの高い糸杉の真ん中に立っており、糸杉はその聖なる場所の護衛として立つ、緑の服を着た衛兵のようである。それは壮大かつ、魅力的な光景であり、聖なる廟を訪れる人々は、その美に胸を打たれ、涙を流し、心を揺さぶられるのである。

バブの聖なる廟は、神の輝きと力の中心であり、カルメル山の中心にある巨大かつ簡素で、堂々とした建物である。その西方<sup>せいほう</sup>にはエリヤの洞窟があり、東方<sup>とうほう</sup>にはガラリヤの丘がある。後方にはシャロンの平野が、正面には銀色の町ハイファがある。そして彼方には、バハイ世界の中心でありケブレ<sup>12</sup>である最も聖なるバハオラの廟がある。

#### 42. バハの太陽沈む

「かつて全人類に輝きを放っていた、世界の偉大なる『光』は沈み、アブハ地平線から永久の輝きを始めた」

---

<sup>12</sup> 「向かう方向」を意味するアラビア語で、礼拝、お祈りの時に向かう方向を指す。



バヒヤ・ハヌーム

数多くの困難と試練、そして偉大な喜びと栄光の年月は過ぎ去り、バハオラは今、76歳に達せられ、地上での使命が終りに近づいてきた。バハオラは、人類を無知と怠惰の眠りから覚まし、神に対して課せられた人類の義務についてお知らせになったのである。

昇天なさる9か月前にバハオラは、この地上での生活を続ける気持ちがないと言われた。この話から、離別の

日の近いことが感じ取られた。

5月10日、バハオラは軽い熱を出された。召使めしつかいを通してアブドル・バハに書簡を送り、こう記された——「私は気分がよくない。ハヌーム(バヒヤ・ハヌーム)と一緒に来て欲しい」。召使は、アブドル・バハと「最大の聖なる葉」(バヒヤ・ハヌーム)用に二頭の馬を用意してきた。そしてアブドル・バハたちはすぐに、バージへ向けて出発した。バハオラは熱で苦しんでおられた。5日後に家族全員がバージに集まったが、バハオラの様態のことでひどく心配していた。バハオラの様態はさらに悪化していた。同月15日、イランから来た何人かの巡礼者たちは、バハオラに会うことを許された。巡礼者の中には、盲目のミルザ・バジルとミルザ・アンダリブという二人の詩人

がいた。二人とも泣き、落ち着くことができなかった。バハオラのベッドの周りを回って、彼らは自分の命を犠牲として受け入れて下さいと、バハオラに懇願した。バハオラは、優しい慰めの言葉を彼らに語られた。そして、神の大業に対して堅固でかつ忠実であるよう勧告なさり、言葉と行動を通して人々を引きつけるように助言なさり、こう付け加えられた——「私はあなた方に満足している。あなた方の振るまいが、良きバハイとして模範を示すことを望んでいる」。

バハオラの様態は少し改善したように思えたが、快復は長続きしなかった。熱を出されてから19日目の5月29日の未明、この世の「虐げられた者」なる御方の魂は、神の国へ昇って行った。1892年5月29日、午前3時のことであった。

ああ、この出来事はいかに人々を動揺させたことか！それは筆紙に尽くし難く、想像もつかないほどの悲しみをもたらした。「祝福された美」の昇天の知らせは、すぐに町中に広まった。人々は至る所からアッカへかけつけ、そしてバージに集まった。慰めようのない悲しみに包まれ、彼らの目からは、最愛なる御方からの別離による苦悶くもんのために涙があふれ出していた。イスラム教徒やキリスト教徒やユダヤ教徒、学者や役人など、バハオラを知っていたほとんどの人がバージの館やかたに集まり、悲しみを表した。信者であるにかかわらず、あらゆる人がバハオラに愛を抱いていた。彼らがバハオラから受けたのは、愛と優しさだけだったのだから。

アブドル・バハは、「祝福された美」の昇天の知らせをスルタン・ア

ブドル・アズィーズに伝え、バハオラの聖なるご遺体をバージの館の近くに収めることを知らせた。スルタンはすぐに同意を示し、葬儀はその日の日没頃に行われた。

今、バハオラの遺体が収められている所は、世界中から訪れるバハイの巡礼の地となっている。そこは「最も聖なる廟」のある場所として知られている。

バハオラが昇天されてから一週間後に追悼式が行われ、あらゆる階級の人々が、大勢でやって来た。詩人や著述家は、バハオラからの別離からくる激しい悲しみを、歌や詩の中に表現した。「バハの太陽」は沈んでしまった。しかし、彼の教えは、世界を導くための明るい篝火として残っている。最後に、バハオラから我々人類に宛てられた、日々をどう生きるべきかについての勧告の言葉に耳を傾けてみよう。

「繁栄にあっては寛大であり、逆境の時には感謝せよ。隣人の信頼に値するようであれ。そして輝かしく友好的な顔で隣人に目を向けよ。貧しき者には宝となり、富める者には勧告し、困窮した者の叫びに<sup>こた</sup>えてやり、誓いの神聖さを保つ者であれ。判断においては公平であり、発言においては注意を怠るなかれ。いかなる者にも不公平であってはならず、あらゆる人に温順さを示すがよい。暗闇を歩く者らのためのランプとなり、悲しみにくれる者らには喜

びとなり、喉の乾いた者には海となり、苦しむ者には避難所となり、圧制を受ける人々を支え守る者であれ。誠実さと廉直性<sup>れんちよくせい</sup>によって汝の行動を際立たせよ。見知らぬ者に家を開け、苦しむ者には鎮痛薬<sup>ちんつうやく</sup>となり、難民が頼りにできる者であれ。盲目の者の眼となり、過ちを犯す者の歩みを導く光となれ。『真理』の顔の飾りとなり、忠誠の額<sup>ひたい</sup>の冠となり、廉直性の聖堂の柱、そして人類の身体に生命を与える息となれ。また、正義の軍勢の旗となり、美德の地平線上の発光体であれ。人の心の土の露<sup>つゆ</sup>となり、知識の海の上の箱舟、そして、恩恵の天の太陽であれ。また、英知の王冠<sup>おうかん</sup>を飾る宝石となり、汝の世代の人々の天空に輝く光、そして謙虚の樹になる実であれ」。

### 43. 敵対する者らの運命

「世界の安定と秩序という構造は、報酬と処罰という二本の柱によって支えられてきたし、これからもそうあり続ける」

#### (1) ナーセロッドイーン・シャー

ナーセロッドイーン・シャーは、バハオラに激しく敵対した最初の強力な国王で、バハオラは彼を「圧制者の王子」と名づけられた。



テヘランの土牢にバハオラを投獄したのもナーセロディーン・シャーであり、その後、バハオラと聖なる家族をバグダッドに追放したのである。バブが殉教されたのも、彼が統治していた時だった。

バハオラは、ナーセロディーン・シャーが善と悪を区別し、正しさと過ち、真実と偽り、そして無罪と有罪の区別をするため、50年という年月をお与えになった。自らの統治50周年を記念して、シャーは、盛大なる記念の祝宴を開くよう命じた。人はこの事について理解に苦しむかもしれない。この統治者は、神を信じる者らを压制し、バハオラによって「压制者の王子」と名づけられたではないか。それではどうして、彼は自分の統治50周年を盛大に祝うことができよう。答えは、こうである。ナーセロディーン・シャーは、自分の暗殺を目論んだ、あの二人のバビ教徒の愚かな行動のために、バハイ信教に対して誤ったイメージを持ってしまった。ナーセロディーン・シャーは、バハイたちが政府と国に反逆しようとしていると思ったのである。それで、バハオラは、真実を調べ、見つけるための時間と機会をシャーにお与えになったのである。

50年後、これらの事実は、シャーに明らかになっているはずだった。ある日、シャーは夢を見た。夢の中で、彼が座している時、宮殿が彼の上に崩れ落ちてきた。彼はこれにぞっとし、目を覚ました。彼はすぐに王宮の占い師を呼んだ。占い師は、統治者の支配権が終りに近づいており、統治者がやがて死ぬという解釈をした。しかし、側近らは、この夢の解釈をシャーに明かしはせず、こう言った

――「陛下、心配なさる必要はありません。おそらくいくらかの困難が訪れるでしょうが、この夢で心を煩わす必要はございません」。しかし、恐怖に満たされていたシャーは、それがきっと不吉な前兆であると思っていた。彼は、翌朝、シャブドル・アズィームの聖堂に誰も入れぬように命じ、自分一人になれるようにした。それは、テヘランの近くにある聖なる場所で、彼はお祈りのためにそこを訪れることになっていた。彼はこう考えた――明日の朝、まずは聖堂を訪れ、悩める心を慰めてもらうため、神に祈り、嘆願しよう。

翌日夜明けに、シャーは王宮の馬車に乗り、シャブドル・アズィームの聖堂に向けて出発した。聖堂に入って熱心に礼拝をしていると、突然、ある若者が彼の方へ向かってやって来た。若者はシャーに手紙を手渡す振りをして銃を抜き出すと、心臓に向けて発砲した。シャーは地に倒れ、命を落とした。

統治者が突然亡くなった知らせに、大臣や役人らはショックを受け、恐れた。彼らはシャーの遺体を馬車に乗せ、宮殿へ運んで行った。帰る途中、彼らは生氣のないシャーの手を人々に向かって振り、誰も彼の死について気づかぬようにしたのであった。

## (2) スルタン・アブドル・アズィーズ

ナーセロディーン・シャーに次いで、バハオラに対して残酷だった国王は、スルタン・アブドル・アズィーズである。バハオラをバグダッドからコンスタンチノーブルへ追放し、さらにアドリアノーブルへ、

そしてアッカの流刑植民地に追放したのは、この人物である。バハオラは、この世から去るまで牢獄におらねばならないと宣告したのは、この国王である。このような残虐行為や圧迫については、神が証人であられる。

バハオラがアッカの牢獄におられる時、スルタンの国内で突然、反乱が起き、スルタンは捕われ、投獄された。その後を継いだのは、もう一人の暴君アブドル・ハミードであった。

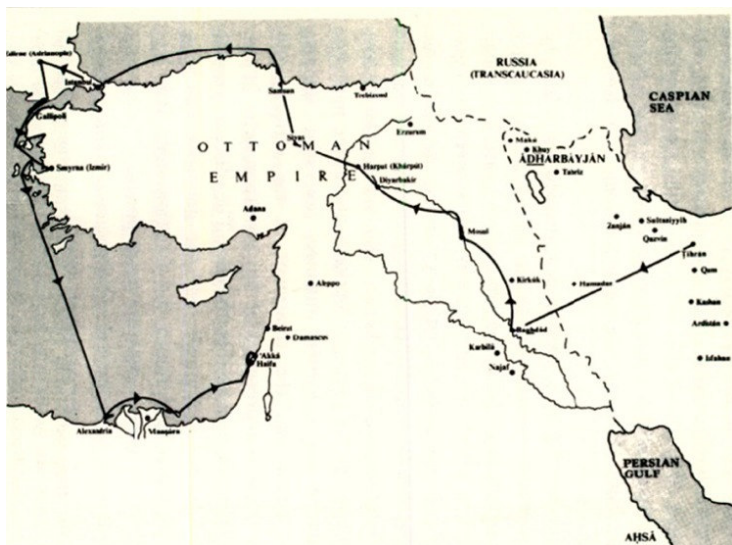
牢獄にいる時、アブドル・アズィーズは食べ物或少しくれるよう請い、もう少し大きな場所に移してもらおうよう頼んだ。しかしその願いは拒否され、彼は死ぬまで、空腹と喉の乾きを十分に満たされないまま、その狭い部屋に監禁されていた。

ある日、番人が来てみると、アブドル・アズィーズが死んでいた。彼が亡くなってから、すでに数日<sup>た</sup>が経っており、死体は、小さな部屋で腐りかけていた。絶対専制の権力と栄光を有していたこの強力な国王は、かくのごとく屈辱的な死に方をしたのである。「虐げられた者」なる「祝福された美」にアブドル・アズィが望んでいた運命は結局、彼自身に降りかかったのである。40年間、バハオラを圧迫した者には全て、その罰としての運命が降りかかった。「この世は報酬と罰<sup>さば</sup>の世界である」... そう、邪悪な者らは、この世にいる間にも、その判き<sup>さば</sup>を受けることがありうるのである。善は善によって、そして悪は悪によって、その報いを受けるのである。

この世で善を行い、善なる終りを迎える者は幸いである。悲しみと

苦しみに満ちたバハオラの人生と教えについて知ることにより、神の顕示者を認めた者は幸いである。「祝福された美」がなぜ、宮殿での贅沢な生活を犠牲になさったか考えるために立ち止まる者は幸いである。なぜバハオラは若い時に申し出された大臣の地位を拒否なさったのだろうか。どうしてバハオラは安楽と安らぎを捨てられたのだろうか。そして、どうして40年間を追放と牢獄の生活で送られ、あらゆる苦難に耐えられたのだろうか。これらの疑問に対しては、バハオラご自身の言葉が明白に答えている。

『『古来の美』は、人類がその束縛から解き放たれんがために、鎖につながれることを受け入れ、全世界が真の自由を得らんがために、この最も強大な要塞に監禁されることを受け入れた。彼は地上のあらゆる人々が、永続する喜びを得、それで満たされんがために、悲しみのコップからその粕<sup>かす</sup>まで飲みほした。これは憐れみ深く、最も慈悲深き御方なる汝らの主の慈悲によるものである。おお、神の単一性を信じる者らよ。我は、汝らの地位が向上されんがために、屈辱を受けることを受け入れ、汝らが栄え繁栄せんがために、様々な苦しみを受けたのである。神を自らと同等の者となした者らが、新しい世界を築くためにやって来た彼を、最も荒廃した都市の中に住ませたことを見よ！』



バハオラ追放の軌跡



バハオラの廟の正門

# 索引

<b>あ</b>	
アザーリ .....	2
アシー・カヌーム .....	2
アッカ .....	2
アドリアノーブル .....	2
アブードの家 .....	2
アブドル・アジーズ .....	2
アブドル・ヴァハーブ .....	2
アブドル・カシム .....	2
アブドル・ガファー .....	2
アブドル・バハ .....	2
アブル・カシム .....	2
アラホ・アブハ .....	2
アレキサンダー2世 .....	2
アレキサンドリア .....	2
<b>い</b>	
イスファンディア .....	2
イスラム教 .....	2
イスラム教徒 .....	2
イマーム .....	2
イラン .....	2
<b>う</b>	
ウイリアム1世 .....	2

<b>お</b>	
オットーマン .....	2
<b>か</b>	
カーシード・パシヤ .....	2
カラ・グハル .....	2
ガリポリ .....	2
カルメル山 .....	2
<b>き</b>	
犠牲 .....	2
キプロス .....	2
キリスト教徒 .....	2
<b>け</b>	
ケタベ・アグダス .....	2
ケタベ・イガン .....	2
献身 .....	2
<b>こ</b>	
コーラン .....	2
黒海 .....	2
ゴッドス .....	2
古来の美 .....	2
コンスタンチノーブル .....	2

<b>さ</b>	
サエサン .....	2
小夜鳥 .....	2
<b>し</b>	
シア・チャル .....	2
シシュマン .....	2
囚人 .....	2
祝福された美 .....	2
殉死 .....	2
<b>す</b>	
スルタン .....	2
<b>せ</b>	
宣布 .....	2
<b>そ</b>	
ソレイ・マニエ .....	2
<b>た</b>	
ダーヴィツシュ .....	2
タージュ .....	2
タクール .....	2
タヘレ .....	2
<b>ち</b>	
チグリス川 .....	2

<b>て</b>	
テヘラン .....	2
<b>な</b>	
ナーセロツディーン・シャー .....	2
ナジビイの庭園 .....	2
ナポレオン .....	2
ナミク・パシヤ .....	2
<b>ぬ</b>	
ヌール .....	2
<b>は</b>	
バージ .....	2
ハイファ .....	2
バグダッド .....	2
バダシト .....	2
バディ .....	2
バハイ .....	2
バハイ教 .....	2
バハオラ .....	2
バビ教 .....	2
バヒヤ・カヌーム .....	2
バブ .....	2
<b>ひ</b>	
ピウス9世 .....	2
ビクトリア女王 .....	2

<b>ふ</b>	
フセイン・アリ .....	2
ブラウン博士 .....	2

<b>ま</b>	
マジンダラン .....	2
マズラエ .....	2
マリー女王 .....	2

<b>み</b>	
ミルザ・アジーズ .....	2
ミルザ・ブズルグ .....	2
ミルザ・ミフデイ .....	2
ミルザ・ムサ .....	2

<b>む</b>	
ムアリム .....	2
ムツラー .....	2
ムハンマド .....	2
ムハンマド・シェイク .....	2

ムハンマド・タキ .....	2
ムハンマド・パシャ・サフワト ...	2
ムラ・アッバース .....	2
ムラ・フサイン .....	2

<b>や</b>	
ヤーヤ .....	2

<b>り</b>	
リダ・ターク .....	2

<b>る</b>	
ルーマニア .....	2

<b>れ</b>	
レズワン .....	2
レズワンの園 .....	2

<b>ろ</b>	
牢獄 .....	2